

Spiritualism News Letter

2001
第 12 号
1 月 1 日発行

スピリチュアリズム・ニューズレター

発行/スピリチュアリズム・サークル 心の道場
発行人/小池里予

〒441-3141 愛知県豊橋市大岩町字北山468-1

TEL 0532-41-0537 FAX 0532-41-8257

ホームページアドレス <http://www5a.biglobe.ne.jp/~spk/>

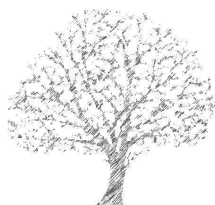
今号の内容

- ・スピリチュアリズムから見た日本国家と日本民族の繁栄……………1
- ・未来の地球とスピリチュアリズム……………19
- ・ニューズレター発行の目的について……………30

スピリチュアリズムから見た 日本国家と日本民族の繁栄

昨年は森総理大臣の“神の国”発言を巡り、大きな議論が巻き起こりました。スピリチュアリズムでは、こうした愛国心や民族主義・国体といった問題について、どのように考えるべきなのでしょう。またスピリチュアリズムの観点に立ったとき、日本の誇るべき点あるいは問題点とは、どのようなものなのでしょう。

シルバーバーチやインペレーターの霊訓の中には、欧米の国々について言及した箇所がありますが、残念なことに日本について述べたものはありません。しかし他国に対して語られた言葉を通して、霊界の高級霊が現在の日本をどのように眺めているかを理解することができます。今回はスピリチュアリズムの観点から見たときの、日本と日本人について学ぶことにしましょう。それを通して、今後日本はどのような方向で努力すべきか、また国家としてどのように進んでいくべきかを考えてみたいと思います。



(1) 民族意識と愛国心

日本民族である前に、神の子供であり
同一の地上人類

科学技術の急激な発展に伴い、世界はここ100年の間にみるみる小さくなってきました。経済活動は国境を越えて行われ、地球は共通の活動の場となってきました。現代の地球においては、国境の壁はどんどん低くなっています。つい150年前までは日本は鎖国政策の下、他国との交流を避けていましたが、現代では国際社会の中に組み込まれ、世界の一員として歩まざるを得なくなっています。私達一人一人も、国際人であることは避けられなくなってきています。こうした地球人類史上初めてのグローバル化の時代を迎え、日本が国際社会でその立場を確立するためには、日本人としての明確なアイデンティティーを持つことが必要であるという意見が出されるようになってきました。日本民族としての自覚が希薄になることは、国際人としての立脚点を失うことであり、同時に国の将来の存立を危うくするものであると考える多くの人々がいます。

彼らは日本を愛すればこそ、国際交流が日常的になった現代には、日本人としてのアイデンティティーが必要であると強く感じるのです。国際人になる

ためには、その前に日本人としての自覚が必要であり、日本人としての明確な民族的自覚を持たずして、どうして良き国際人たり得るのかと考えるのです。昨年の秋に出版され大変な好評を博した『国民の道徳』(西部邁著)には、そうした憂国の思いが余すところなく著されています。日本に対する愛国の思いがひしひしと伝わってきます。物質文明の中であって、日本の良き精神的伝統を守ろうとする気高い志を感じることができます。心から日本の行く末を憂える人々は、まさに日本における精神的支柱なのです。

しかしスピリチュアリズムは、「愛国心」を無条件に正当なものとして認めることはしません。スピリチュアリズムでは、そうした憂国の心情を純粹で尊いものとしつつも、さらに高い霊的次元から別の見方をするのです。それは、地上世界を国別・民族別に考えず、すべての地上人類を神の前における同じ兄弟姉妹として見るということです。霊界の人々が地上世界を見るとき、国家や民族の違いを問題にしてはいません。肌の色・言葉の違いなどは霊界の人々にとって無きに等しいものです。霊界においては、地上人の霊性ならびに心の内容こそが考慮の対象となるのです。地上人の身体的特徴の相違が問題ではなく、心の中身・霊的レベルこそが重要なものとなるのです。

スピリチュアリストは霊界の人々に倣って、地上にいながら霊的視点から物事を考え、判断しなければなりません。私達は、霊界の人々と同様な視点に立って、日本民族ならびに日本国を見ていかなければなりません。常日頃から日本人と外国人を、霊的存在として同一の人類、神の子供として等しい人類と考えるようにしなければなりません。愛国者であることは間違っていないかもしれませんが、それ以上に、世界人類として愛し合うという姿勢が優先されなければならないのです。世界と全人類があり、その後日本と日本民族が存在するという位置関係こそが、スピリチュアリズムにおける基本的な考え方なのです。

地上世界を国別、民族別に考えてはなりません。すべてが大霊の一部であることを教えなさいといけません。みんな大霊の子なのです。海で隔てられていても、大霊の前では兄弟であり姉妹なのです。

(シルバーバーチ11・185)

霊的に言えば、皆さんはお互いにつながり合った関係にあります。人類は一大霊的家族を構成しているのです。なぜなら、霊性という共通の要素が、神とのつながりと同じように、切っても切れない絆によってしっかりとお互いを結びつけているからです。

(シルバーバーチ11・203)

*シルバーバーチは英国の王室存続についての質問を受け、国民の心をつつにするようなものは善いものとして、英国王室の存続に対して賛成の見解を述べています。こうしたことから判断すれば、これまでとかく議論の対象となってきた国旗や国歌の問題も、同様の理由から肯定されるべきです。唯物的思想から国旗や国歌を廃止しようとする考えは間違っています。天皇制の問題についてはいずれニューズレターで取り上げる予定ですが、スピリチュアリズムは、現在の象徴としての天皇の存在を認める立場に立っています。

「民族・国家意識」から「世界同胞意識」へ

先に述べた純粹な憂国の思いにあふれた愛国者達は、日本の将来を憂い、物質主義が横行する中であって精神的支柱と言えます。しかし残念ながら、彼らは霊的世界を踏まえた広い視野に立ってはいません。そのため結局、物質次元に基づく判断にとどまることとなり、日本における“霊的支柱”になることができないのです。もし彼らに霊的視点と現実の霊界に対する認識があったならば、その純粹な思いは「愛国主義」を超えて、初めから「世界主義」に立つことになったはずです。最も大きなところから

判断するための霊的真理・霊的視点がないことが問題なのです。そのため人類に共通な霊的要素の重要性が理解できずにいます。霊界から見れば、人種や民族・国家に由来する違いなどほとんど無きに等しいものであり、同じ地上人としての共通要素の方が圧倒的に多いのです。

私達は日本人である前に、「地球人」としての意識を持つように努めなければなりません。地球は21世紀を迎えた現代において、スピリチュアリズムの到来により、人類史上初めて国家意識を現実的に乗り越えることができる新しい時代に入ってきたのです。キリスト教・イスラム教・仏教の世界三大宗教は、国家の壁を超えた人類共通の霊的世界の確立を目指してきました。しかし現実には、そのいずれにおいても地上世界の物質的限界を超えることができず、人類共通の霊的世界の建設は理想で終わってしまっています。スピリチュアリズムは、それらの世界宗教が求めてきた人類の希望を現実のものとする使命を持っているのです。

「再生」の観点から日本人を見ると

日本人としてのアイデンティティーを求めるよりも、先に地球人であろうとしなければならないというスピリチュアリズムの見解は、「再生」という事実を考えてみるとより明確になります。私達は霊的真理によって再生の人生を歩むことを知らされています。大半の人々が、今後も別の地上人生を送ることになる可能性を持っています。それを溯^{さかのぼ}って考えると、今日本人として地上人生を歩んでいる私達の前世が、中国人や欧米人であったということもあり得るのです。もしかして皆さんは、日本の植民地時代に蛮行を受け死に至った中国人であったかも知れません。今日本を非難し続けている朝鮮人が、かつては日本人の軍人であった可能性もあるのです。ユダヤ人とドイツ人の間にも、こうした関係があることも考えられます。現在ユダヤ人としてナチス追及を進めている人物が、前世ではナチス党员としてユダヤ人虐殺に加わっていたかも知れません。

このような再生の事実を考えてみると、今の地上

人生だけの視点で民族や国民を固定化・限定して考えることは、いかに間違っているかが明らかになります。「再生」という事実^に照らして見るとき、そこには神の霊を分け持った霊的存在（一個の霊）があるのみで、地上における民族の違いなどは、その“霊”の単なる表皮の一つに過ぎないことが分かります。そうした表皮は地上かぎりのものであって、死とともに消滅してしまいます。私達の本質は“霊”であり、日本人でもアメリカ人でもないのです。こうした再生の観点から見れば、私達は「地球人」（霊）としての意識を優先すべきであって、日本人という民族意識・民族的アイデンティティーにこだわることは二の次でなければならないということになります。

私にとってはどの人間もみな“肉体を具えた
スピリット
霊魂”です。私の目にはドイツ人もイギリス人もアメリカ人もありません。みなスピリットであり、大霊の一部であり、神の子供です。

(シルバーパーチ3・162)

「類魂」の観点から日本人を見ると

霊的真理によれば、私達は死後幽界で一定の生活をへて、霊界に入ります。そこでは霊的成長レベルの等しい者同士の生活が始まります。その集まりにおいては各自の意識が共有（融合）され、一つの大きな霊的意識体を作り上げます。これが「類魂」と言われるものです。類魂では、各自の意識内容と地上体験が共有されることとなります。その結果、自分と類魂の仲間が同一の意識を持つこととなります。あなたの地上体験は私の地上体験ということが現実に起きるのです。ここにおいて地上における民族や国の違いは霊的意識の中に溶け込み、無きに等しいものになります。霊界における類魂の一員になることによって、地上では不可能な民族や国家の壁を完璧に超えることが可能になるのです。ここでは、同じ神の子供、神の霊を付与された霊的存

在としての意識が全員を支配しています。人類の本質である純粋な霊としての意識が開かれ、地上的壁がすべて消え去るのです。このように死後は「類魂」の中で地上時代の区別を完全に拭い去り、霊的な兄弟姉妹として生活するようになります。

私達スピリチュアリストにおける意識の持ち方は、地上にあって、それと等しい世界を目指すべきなのです。外国人に対して、地上的壁・物質的区別を取り払った霊的観点から見なければならないのです。

地上を去り、地上的習性が消えていくと、民族性や国民性も消えていきます。魂には民族も国家もありません。あるのは肉体上の差異だけです。

(シルバーバーチ 2・130)

愛国者の死後の歩み

日本人である前に地球人でなければならないということは、霊界における愛国者の死後の歩みを見ることによっても明らかになります。シルバーバーチは次のように言っています。

地上で国家的な仕事に邁進してきた人は、あなた方が死と呼ぶ過程をへても、それをやめってしまうわけではありません。そんなことで愛国心は消えるものではありません。なぜなら愛国心は純粋な愛の表現ですから、その人の力は引き続きかつての母国のために使用されます。さらに向上すれば国家的意識ないしは国境的概念が消えて、すべては神の子という共通の霊的認識が芽生えてきます。

(シルバーバーチ 5・235)

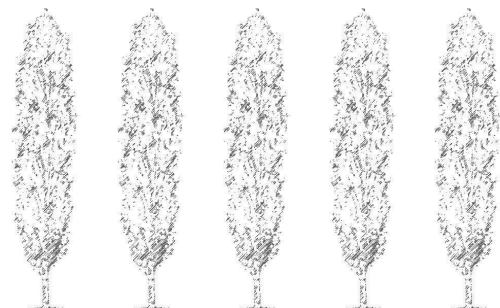
地上では強烈な愛国者・民族主義者であっても、霊界に入り霊的に成長するにつれ、そうした意識を徐々に拭い去っていくことになります。これは私達

が地上において、民族主義者の壁を超えて、初めから「世界同胞意識」を持って生きることが可能であり、それが高次の生き方であることを示しています。

地上世界における国民性・民族性の形成

国民性とか民族性といった国民や民族に独自の共通要素・傾向については、どのように考えたらよいのでしょうか。日本人の国民性とかアイデンティティーとは、どのようなものなのでしょう。ユングの言う集合的無意識の中に存在するアーキタイプ(元型)のようなものがあると考えればよいのでしょうか。

私達地上人は霊と霊体と肉体から成り立っています。そして霊的世界と物質的世界の両方の世界から影響を受け「霊性」を向上させていきます。地球上には私達の精神にさまざまな影響を及ぼす要素があります。気候や地理的要因、また歴史的要因や宗教的・文化的要因などです。これらが総合的に影響を及ぼすことによって、そこに住む人々に共通した精神的傾向(型)を作ることになります。このようにして形成されたある共通の精神的型を「国民性・民族性」と考えることができます。日本人の持つ繊細さや誠実さ、グループ性などは、この精神的型の一つと言えます。こうした共通の精神的傾向は、教育や習慣を通じて、あるいは伝統として地上の子孫に引き継がれていくことになります。



民族全体に対するカルマの法則

またシルバーバーチは、民族にはその先祖によって作られたカルマという地上的制約が存在することを明らかにしています。「カルマの法則」(因果律)は、神の作られた世界を支配する摂理・法則ですが、それは一人一人に適用されるばかりでなく、民族に対しても、あるいは国に対しても同様に作用するものなのです。先祖が神の摂理に合った善行を積み、それは子孫に良い結果をもたらします。反対に先祖が摂理に反したことをすれば、それは子孫に罪の償いのための苦しみとなって現れます。こうした先祖から受け継いだカルマによって、民族・国民が一つの共通した運命を持つこととなります。

具体的に言えば、民族全体がエゴ的な動機から他の民族を力で支配し、^{しいた}虐げたような場合には、それが「民族全体のカルマ」として子孫に持ち越されます。そしてその清算のために苦しむような事態が生じてくるということです。

自己のカルマ清算と、民族のカルマ清算の関係

ある霊が地上に再生するに際しては、自分の個人的カルマを清算するのにふさわしい条件を提供してくれる民族や国を選ぶこととなります。その国の人間になることによって、自己のカルマ清算と、その国のかつての地上人達(先祖達)のカルマ清算とを同時になすような歩みが始まることとなります。自分のカルマを償うために、その国にあるカルマの苦しみを利用することになるのです。また自分の霊性をより高めるために、そして神への貢献の場を求めて再生する国を選ぶこともあります。その国にある善いカルマや精神的型を自分のものにして霊的進歩を図ろうとするものです。

このように再生とカルマの間には非常に複雑な要因が幾重にも絡まっています。その民族の先祖が犯した罪の償いを子孫がするような道と、自分個人のカルマ清算の道が重なり合って進んでいきます。

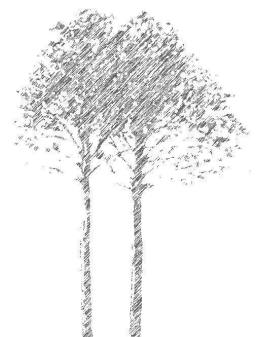
* 「国際人」と「地球人」の違い

国際化が進むにつれて海外に出かけたり、外国人と付き合う機会が多くなってきました。また日本国内にも大勢の外国人の姿を見かけるようになり、国際結婚をする日本人も珍しくありません。最近では、こうした国際人と言ってもよいような日本人が増えてきました。

しかし単に外国で生活したり外国人と結婚することが、地球人になったことを意味するわけではありません。そうした国際人が必ずしも「地球人」ということではないのです。英語を話し、外国人の友達をつくり、海外に家を持ち、海外で仕事をするによって国際人になることはできますが、それによって霊的に優れ、立派な人間になったということではありません。国際人であることは、霊的な観点から見たとき特別すばらしいこととは言えません。国際人とは、単に物質次元の諸条件によって決められるものであり、国際人イコール良い地球人ではないのです。

地球人と国際人は、霊的内容の点で全く異なっています。霊的意識と霊的自覚がなければ、地球人になることはできません。つまり地球という物質世界を霊的視点から眺めることができるようになって、初めて地球人としての資格を持つことができるということなのです。国際人になるためには、霊的人生観や霊中心の価値観を持つ必要はありません。国際人になるのはさして努力の要ることはありません。それは物質的なわずかな条件さえ整えば、誰もがなれるという程度のことなのです。

一方、地球人とはどこまでも、霊的観点に立った高い霊的意識を持った人間のことです。地上にいながら物質世界を超越することができる人間のことを言うのです。まさにスピリチュアリストこそ、「本物の地球人」となる資格を持っているのです。



(2) 日本人の真の靈的宝とは

本当の靈的価値とは

外国人に日本を紹介する際、必ず取り上げられるのが日本の伝統文化です。茶の湯・生け花・浮世絵・書道・陶芸、また歌舞伎・能・文楽・狂言などの伝統的芸能、あるいは相撲・剣道・柔道・弓道などの伝統的武道、伝統的日本建築や日本庭園などです。さらには日本独自の宗教として神道や禅仏教が紹介されたり、歴史のある古い神社仏閣が取り上げられます。こうした伝統的文化は私達日本人にとっての誇りであり、他国には見られない日本独自の文化と言えます。

しかしスピリチュアリズムという靈的視点から見たとき、必ずしもそれらが「靈的価値」を持っているということにはなりません。ただ珍しいとか、他に類例がないというだけで靈的価値が決定されるわけではありません。物質主義に支配された現在の地上世界にあっては、希少性や独自性、歴史の古さが一つの価値決定の基準となっています。けれどもスピリチュアリズムにおける価値基準は、そうしたものは全く異なります。スピリチュアリズムにおける価値は、それが人類の靈的進歩に役立つかどうか、あるいは間接的であっても人類の靈性向上に貢献することができるかどうか、という点において決定されます。

従って世界文化遺産に登録されたからといって、靈的価値があるとは言えません。単なる歴史的な遺物に過ぎないものや遺跡、古い仏教建築物には靈的価値はありません。法隆寺のような世界最古の木造建築物であっても、現代人の靈的進化に貢献することがない以上、全く価値はないということになります。単なる物質に過ぎないものに靈的価値はありません。朽ち果てかけた仏像や、時間だけが経って古くなった神社仏閣などの建物自体には何の価値もありません。物欲に絡んだ人間の怨念が染み込んだような文化財や骨董品も同様です。そうした人間が作り出した物に比べて自然の風物は、私達の心を癒し、

はるかに多くの靈的エネルギーを与えてくれます。いかなる歴史的遺物も、自然ほどの靈的価値は持っていないのです。

人類の靈性進化に役立つかどうかという単純な基準において、すべての「靈的価値」は決定されます。そうした基準に照らしたとき、現在地上で価値があるとされているものの大半は、捨て去ってもよいようなものばかりです。それらはガラクタに類するようなものなのです。源氏物語は日本が世界に誇る文学と言われていますが、貴族生活の恋愛葛藤・官能的世界・文学的遊戯に終始した作品が、一体どれだけ読む人の靈性を高めると言うのでしょうか。そのような文学作品には靈的価値がないことは明白です。源氏物語は靈的観点から見たとき、単なる地上の低俗な娯楽作品の域を出ないものなのです。

こうしたものについて真の価値判断ができないのは、「靈的真理」が普及していないためです。真理という絶対の基準がないために、人類にとって本当に価値のあるものは何であるかが分からないのです。

伝統的日本文化

それでは日本の伝統的文化はどうでしょうか。日本の伝統的文化の特徴として、「道」によって示される精神性があります。茶道・華道・書道・武道などのように、日本の伝統的文化は、単なる実用や趣味や娯楽の段階にとどまらず、それを通じて人間の精神的向上に至ることが目標とされています。これは日本人が、常に精神的な進歩を指向していることを示しています。またより高い目標に向けての自己訓練を貴重なものと考えていることを示しています。このように日本の伝統的文化の中には、徹底して「物より心を重要視する」という日本人のメンタリティーが表れています。日本人は古来より、心を重視し、物質に偏ることを嫌ってきたのです。多くの外国人は、日本人は何をするにしてももっと楽しんでやったらいいと言います。日本人は真面目すぎて遊び心がないと言います。しかし日本人は、何事も精神的なものに結び付けないと安心できないのです。

スピリチュアリズムは霊的成長に係わりのないものには価値を見出しません。その意味で日本人のこうした精神的な向上指向は、スピリチュアリズムと一致していると言えます。霊的成長は、長期にわたる苦難や苦労を克服する体験を通じてのみ可能となります。そうしたスピリチュアリズムの歩みと、伝統的な日本文化における「道」の在り方には相通じるものがあるのです。

禅仏教と神道

宗教は文芸や文学よりも人間の精神的領域に深い影響を与えます。その意味から宗教は、他のいかなる伝統的文化よりも「霊的価値」を持ち得る可能性があるとと言えます。問題は、実際どの程度まで人々の魂を高めることに貢献しているのかということです。霊的貢献度において、その宗教の価値は決定されます。日本の禅仏教には確かに日本独自の要素が見られます。そして部分的ではあっても「霊性向上」に対する貢献性が認められます。それゆえ禅仏教は、日本の誇る“伝統的精神文化”とすることができます。そのため欧米において、日本の禅仏教は注目を集めてきたのです。

では日本の民族宗教である神道はどうでしょうか。キリスト教に代表される教理宗教には、間違った人工の教え（ドグマ）によって人々の霊的成長を妨げるという大きなマイナス点があります。一方、自然宗教である神道には教理（ドグマ）はなく、そのため人間の霊的成長を阻害するという弊害を作り出さずに済みました。また多くの神社は緑豊かな森林の中に位置し、それによって社が清浄化され、そこを訪れる参拝者の心を清々しくします。そうした意味において、神道にはそれなりの精神的効果があると言えますが、霊性向上という点においてはほとんど貢献性がありません。霊的世界に対する事実が明らかにされている時代であって、神道のようにいまだに霊界があるかないかを明確にできないような宗教は、もはや時代遅れであると言わなければなりません。神道については、いずれ今後のニューズレターで取り上げる予定です。

真の日本的なるものの探求

——国学者と鈴木大拙の場合

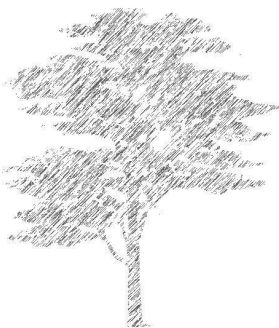
日本の精神は、海外には「大和魂」や「武士道」としてよく紹介されます。日本の歴史上今日に至るまで、日本独自の精神を明らかにしようという意識的な試みが多くの人々によって行われてきました。そうした試みをした代表者として、ここでは江戸期における二人の国学者と、昭和前期の鈴木大拙を取り上げてみます。現代では日本人論が大流行で、さまざまな方面（作家・歴史家など）から日本人のアイデンティティー探しがなされてきました。

国学は江戸時代に、外来宗教である仏教や儒教の支配に反対する立場から生まれました。国学者は仏儒の外来宗教が日本に伝来する以前に、日本には独自の精神があったのだとします。それが成熟しないうちに外来宗教が入ってきたため、十分に育たず、仏教や儒教の影響を受けることになってしまったと考えます。日本古来の精神を取り戻すには、古典の研究を通じて、仏儒の渡来以前の姿を明らかにする必要があると言うのです。

国学者として最も有名な人物が本居宣長で、古事記の研究でよく知られています。彼は日本人の精神の原点は、源氏物語などの古典文学によって示されている「もののあはれ」を知る心であるとしました。一方、彼の没後の門人（*自称）とされる平田篤胤は、古典の忠実な解釈から離れ、古典を利用した神道的な新興宗教（*平田神道と言う人もいる）を確立しました。この神道は復古神道として知られています。篤胤は、宣長の現世主義と異なり、徹底した来世主義を唱えました。彼は『幽冥論』によって明確な死後の世界を描きました。篤胤、宣長の見解はこのように対極と言えるほどに異なっていますが、仏教と儒教の影響を排したところに、日本古来の独自の精神を求めようとした点において同一の立場に立っています。こうした国学の見解（*特に宣長の見解）は、神道の正当性を擁護する論拠として、たびたび引用されてきました。

しかし、そうした国学者達による日本独自の精神の探求の熱意は理解できるものの、現代においては彼らの主張は根底から崩されています。なぜなら仏教や儒教の伝来以前の日本の宗教とは、アニミズム・シャーマニズムの原始宗教に他ならないこと、彼らの理想とする古道・古神道なるものは単なる国学者の描く理想に過ぎないことが明らかにされているからです。日本独自の精神が古来より存在していたという前提自体が間違いであることは明白なのです。世界の各地に見られた精霊信仰やシャーマニズムが、日本の太古においても等しく見られ、それが古神道と言われるものの実態であるということなのです。

近代における日本人のアイデンティティー研究者と言えば、禅の研究で知られる鈴木大拙を挙げなければなりません。彼は日本人のアイデンティティーを「日本的霊性」と呼び、それを明らかにしようとしました。大拙によれば日本人の霊性の基本となるのは「宗教性」であり、その日本人特有の宗教性は、長い宗教的進化の後、鎌倉時代に至って禅と浄土思想によって確立されたと説きます。そしてその霊的自覚が、現在に及んでいると言うのです。大拙は東西の思想に通じ、さらにスウェーデンヴォルグの翻訳・紹介者としても知られています。こうした幅広い見識と、恵まれた霊的感性を土台とする日本人宗教論は、スピリチュアリズムの観点に照らしたとき、部分的ではあってもスピリチュアリズムと共通する点を持っています。



日本人特有の宗教性とは

先に国民性・民族性とは、先祖代々の人々が、共通の環境的・社会的・宗教的影響を受けたところに形成されてきた一つの精神的型であると言いました。もしそうした精神的型があるとするなら、それは日本人の精神の深層に共通要素として存在することになります。それは霊的とまでは言えないとしても、共通の民族的精神と言えます。人間は元来霊的存在である以上、宗教的影響を強く受け、それが国民性の形成に大きく係わることになります。このような点からすれば、大拙のように宗教に目を向け、そこに日本人独自の共通的精神性・宗教性を見い出そうとしたことは正しいと言えます。その国の宗教性は国民性と密接な関係を持っています。では日本人に特有な「宗教性」とは何でしょうか。

諸外国、特に欧米諸国と比較したとき、日本人の持つ歴史的な宗教的特徴は、複数の宗教を同時に信仰してきたという点にあります。仏教と神道ばかりでなく、シャーマニズム的なものに対しても、これを抵抗なく受け入れるという“二重信仰”を長い間続けてきました。この時代を越えて引き継がれてきた二重信仰こそが、日本人特有の宗教性であり、民族性を示しています。そして、それは日本人の「宗教的な柔軟性」から生じたものです。日本人は歴史的に、表の宗教（仏教・神社神道など）と裏の宗教（民間信仰・シャーマニズム信仰）を同時に受け入れ信仰してきました。日本人は性質の異なる二種類の宗教を何の抵抗もなく信仰することができたのです。これは西欧の一神教の立場からすれば大変矛盾したことであり、宗教心に一貫性が乏しいということになるのですが、日本人はそれをごく自然のこととして受容してきたのです。

また日本人が現在に至るまでシャーマニズムをすんなりと受け入れてきたという事実は、一神教の立場から見ると、時代遅れの原始宗教をいまだに引きずっているということになります。しかしそうした批判は、どこまでも一神教だけを一方的に進んだ宗教形態と決めつける傲慢さから出たものです。日本人がシャーマニズムという霊的世界に対する関心を

持ち続けてきたことは、スピリチュアリズムの観点に立てば、「純粋な霊性」を保ってきたことを意味しています。一神教こそ最も大切な霊的世界との係わりを遮断してきたということなのです。実は、表の教理宗教と裏のシャーマニズムへの二重信仰という在り方は、何も日本に限ったことではなく、世界各地において、特にアジア地域においてはごく普通に見られることです。しかし日本のような世界の中で先進国と言われる国において、シャーマニズムが陰ながら今日まで大きな力を持ってきたということが重要なのです。

以上のような、「宗教における柔軟性」と「シャーマニズム的な心霊的世界への関心と畏怖」が、日本人の宗教心の土台になっていると思われまふ。これが日本人の精神的な共通の型を形成する際の、一つの要素になったと考えることができます。日本人の中に、宗教に対する柔軟性と霊的な世界に対する畏怖の思いという二つの要素があるということは、スピリチュアリズムから見れば、日本人が稀に見る「豊かな霊的感性」を持ち続けてきたと言えるのです。

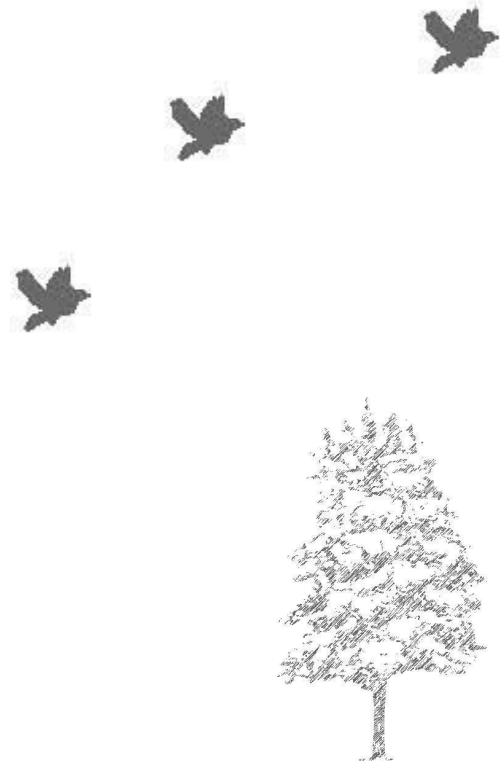
日本人の「グループイズム」

日本人のアイデンティティーあるいは国民性については、それを見る角度によってさまざまに論じることができます。ここではスピリチュアリズムの価値観を基準にして、日本人の国民性を、これまでとは別の方向から見ていきたいと思ひます。スピリチュアリズムの観点に立ったとき、日本人が真に誇りとすべきもの、あるいは日本人が有する霊的価値とは何でしょうか。私達日本人に果たしてそうしたものがあつたのでしょうか。外国人と親しくなれば、互いの違いは国民性や環境によるものよりも、個人個人の性格や考え方や霊性の違いによるものの方が大きいことに気がつきます。さらに互いの相違点よりも共通点の方が多きことにも気がつくようになります。まさに日本人も外国人も同じ地球人であることを実感します。しかしその一方で、性格の違いだけではなくとも、明らかな国民性の違いがあることを

知るようになります。

日本人は欧米人と比較したとき、個性が乏しく、すぐ集団化されると言われます。確かに海外における日本人の動向はそれを物語っています。外国に何年もいながら現地人と交わることをせず、日本人コミュニティの中だけで過ごす人々が数多く見られます。また日本人は自己主張しないので、何を考へているのか分からないと非難されます。欧米人は、日本人の特性を「集団主義」(グループイズム)と言ひます。確かに多くの日本人は集団に属することで安心を得、集団の中に溶け込もうとします。集団から浮き立ってしまうような自己主張は控え、仲間との摩擦を避けることに極端に気をつかい、グループの人からどのように思われるかを絶えず気にします。欧米人の論理からすれば、日本人の集団主義・グループイズムは一刻も早く改めるべきものということになります。

ところがスピリチュアリズムの観点に照らしたとき、この集団主義は決して一方的に排除すべきものではないのです。それどころか、時には優れた“霊的資質”の一つにさえなり得るものなのです。



イエスの教えを自然に実践してきた日本人

日本人はザビエルの時代より、西洋の宣教師によって、「キリスト教徒でないにもかかわらず極めてキリスト教的である」と言われてきました。キリスト教の“隣人愛”をごく自然な形で実生活の中で体現している民族として、西欧の宣教師達を感嘆させてきました。彼らはキリスト教徒でない日本人の中に、ヨーロッパ人よりもキリスト教的なものがあることを発見していたのです。

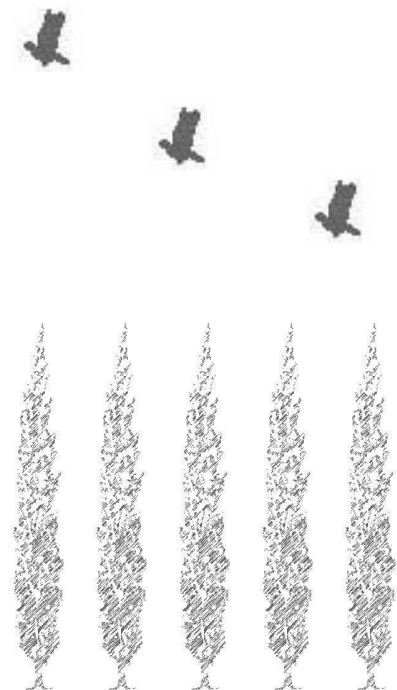
スピリチュアリズムにおいてもキリスト教においても、最高の徳・最高の宗教的実践とされるものは「利他愛の実践」です。この点については、スピリチュアリズムとキリスト教では完全に一致しています。多くの部分が改竄^{かいざん}され霊的真理をわずかしか含まなくなっている聖書の中にあつて、この利他愛・無償の愛・自己犠牲の愛・敵をも愛する愛・別け隔てのない平等な愛こそは、まさにイエスの教えを忠実に伝えている箇所と言えます。イエスの教えは、スピリチュアリズムで言う「利他愛」に他なりません。それを隣人愛の徳として説いたのです。しかし、これは現在の地上人にとって最も厭うべきものになっています。クリスチャンでさえ、自己犠牲などというものは時代遅れだと考える人が多いのです。

戦前の日本人にあつては、自分の所属するグループのために自分の事情や利益を後回しにすることは、ごく当然のこととして行われていました。自分の利益を主張するより先に、まず全体の利益を考える、そのために自分を犠牲にしたり助け合いに必ず参加することが当然とされていました。そうした中では、自己主張をするよりもまず自分が周りに合わせる、自分の意見は口にせず引っ込める、自己を無条件に抑えることが当たり前とされていました。全体があつてその後自分と自分の家族があるという順序が、はっきりとしていたのです。国のために自己を犠牲にするだけでなく、家庭をも犠牲にすることを当然としてきました。こうした精神的伝統は、戦後の日本人社会の大変革の時期を迎えても、容易に消え去ることはありませんでした。つい最近まで多くの日本人は、会社のために自分の家庭を犠牲に

することを当たり前としてきました。日本人は、会社のために自分の家庭を犠牲にする唯一の国民と言われてきました。「滅私奉公」とは、まさに日本人のそうした在り方・精神を言い表した言葉です。それが封建時代における「武士道」でもあったのです。

滅私奉公も武士道も、スピリチュアリズムの利他愛・自己犠牲・滅私的愛に通じるものであり、キリスト教で言う他人のために命を捨てる生き方に他なりません。従つて、日本人はスピリチュアリズムもキリスト教も知らなかったけれども、結果的に、それに近い生き方・生活をしてきたと言えるのです。

スピリチュアリズムでは、「何を信じるかより、何を実行してきたかが重要である」としますが、日本人はスピリチュアリズムもキリスト教も知らないまま、それらの教えを忠実に実行してきたということなのです。キリスト教で説く隣人愛を自然の形で身に付けているのです。西欧からやって来た宣教師達がキリスト教の教えの実践を日本人の中に見たのは、このためだったのです。もし当時、スピリチュアリズムによる「霊的真理」が示され、神と霊界を中心とする正しい信仰観によって縦の霊的関係を確立していたならば、素晴らしい理想的社会、スピリチュアリズム的社会を作り上げていたと思われま



他の東北アジア人と異なる日本人

戦前までの日本人には、こうした世界に稀な霊的真理に通じる優れた精神的伝統が存在していました。スピリチュアリズムの観点から見れば、日本人は大いなる内面的宝を持っていたとすることができるのです。同じ東北アジア人でありながら、中国人も韓国人も他の国々の人々も、日本人のようではありません。いずれの国においても一族の利益と血縁関係を重視します。血のつながりのある範囲内での協力や助け合いはしますが、外部の世界に対してはそれは問題外なのです。こうした血縁関係に基づく結束は、動物的本能と同じレベルのものなのです。動物と等しい本能に支配された、きわめて利己的で自己の利益を優先する在り方なのです。そうした彼らが、国のために自分の家族を犠牲にするようなことは決してできません。ましてや会社のために家庭を後回しにするというようなことは、あり得ないことなのです。

*アジアにおけるこうした血縁中心の社会システムの背景には、儒教による先祖霊崇拝の習慣があります。儒教の持つ祖霊崇拝は日本の儒教には全くないため、儒教とは先祖の霊を祀る事とは無縁のように思う人々が多いのですが、本来の儒教は、祖霊崇拝が宗教の中心的・核的部分を占めています。このことは台湾や韓国の儒教の様子を見るとはっきりします。こうしたことについては、いずれニューズレターで取り上げることにします。



日本人の謙虚さ

多くの日本人は、人前での自己主張を避けようとします。そして強い自己主張をする人や攻撃的な人、自己の能力や富をひけらかす人を嫌います。日本人は謙虚さや謙譲の精神を持った人を尊び、謙虚さを人徳の第一に挙げます。これは日本人が全体の和を最も優先するところに由来します。強い自己主張や個人主義は、全体の和を乱すことになるからです。

日本人を外国人、特に欧米人と比較したとき、根本的に違うのはこの点です。欧米人においては、自己主張は不可欠な要素であり、自己主張のできない人間は未熟であるか能力がないと思われれます。戦後は欧米の力に押され、日本人の自己主張をしない在り方が批判されてきました。そして最近では、多くの日本人は欧米人に倣って自己主張をするようになってきました。謙虚さは日本人の中にあっても、もはや素晴らしい徳目とは見なされなくなりつつあります。

日本人が持っている謙虚さ・謙譲の精神と欧米人の自己主張は、180度の違いがあります。スピリチュアリズムでは、この問題をどのように考えるのでしょうか。私達はシルバーバーチやインペレーターなどの高級霊の言葉から、その答えを知ることができます。高級霊にあっては、謙虚さと自己主張のどちらが優先されているのでしょうか。言うまでもなく高級霊においては、明らかに「謙虚さ」が重要視されています。高級霊の言葉からは、彼らの謙虚な姿勢や考え方が伝わり、大きな感動を受けます。欧米人が競ってなすような自己主張は、高級霊の中にはひとかけらさえ見ることはありません。欧米人の自己主張の在り方は、高級霊の謙虚さとは対極にあります。一方、日本人の中には、シルバーバーチによって示されるような謙虚さが多く見られるのです。シルバーバーチやインペレーターの謙虚さに触れるたびに、日本人の心に極めて近いものを感じることができるはずで、人間の霊性の高さは、自己主張の中にはなく「謙虚さ」の中に現れるものです。それは自己主張が外面的な要素であるのに対して、謙虚さとは心の深いところにしか存在しないも

のだからです。

日本人はスポーツなどで勝利者になったとき、必ず、「皆さんのお蔭で勝つことができました」と言います。皆さんのお蔭ですという言葉に、日本人の謙虚な心情が表現されています。自分が全体の一部であるということと、栄光を自分一人のものにしてはならないという思いが示されています。これが欧米人ならば、自分の努力とかコーチや妻のお蔭であるということになるでしょう。「皆さんのお蔭で栄光が与えられました」という考えは、まさにキリスト教の“神の祝福”に対する感謝と一致しているのです。

日本人は自己の権利を主張する前に、与えられた義務と役割を果たそうとします。自分の権利を主張して自分の利益を確保しようとするよりも、全体に貢献することを優先するのです。これまで欧米人から、日本人は自分の意見をはっきり言わないので何を考えているのか分からないといった非難をたびたび受けてきました。しかし最近では、日本人の持つ謙虚さの深い意味が理解され始め、好意的に受け取られるようになりつつあります。自己主張は、靈性の低い世界における処世術に過ぎず、素晴らしいものではありません。未熟な世界における未熟な人間同士において必要とされるものなのです。

人をいつまでも責めない日本人

外国人と一歩踏み込んで付き合うようになると、日本人は何とお人好しで単純な善人なのかと実感させられるようになります。外国人にとって、日本人を騙すことはとても簡単なようです。日本人は他人の言葉を疑ってかかることをせず、まともに信じます。そうした日本人に対して多くの外国人は、純朴さと同時に子供っぽさを感じています。日本人は他人を初めから善意で眺め、悪意や疑いを持って見ることができないのです。他人を見たら泥棒と思えという言葉は外国人にとっては当たり前ののですが、日本人にはどうしてもしっくりきません。争いの絶えない利己主義中心の世界にあって、他人の言葉をそのまま信じる無防備さは、世界の人々には常識外

れに映ります。

他人を善意でのみ受け入れることと同じように、日本人は、他人をいつまでも憎み続けることができません。人を憎んだり恨みを持ち続けることができません。もしそうした人間がいるなら、それを執念深さとしてとらえ、その人との係わりを避けようとします。日本人は、大半の過去の出来事を時間とともに水に流して忘れようとします。人の過ちを許し責めないということは、キリスト教における大切な教えですが、現実の地上世界では、キリスト教徒であっても相手の失敗を徹底して責め、相手に対する復讐心を忘れようとしません。自分を騙した相手をいつまでも許そうとしません。ここでも日本人はキリスト教徒ではないのに、極めてキリスト教的であると言えます。日本人は自然にキリスト教の教えを実行しているのです。キリスト教徒であっても自分を害する相手を許すことができない現状の中で、日本人はいつも簡単に相手の非を許し忘れてしまうのです。時には自分が騙されたとしても、「自分は騙す立場ではなく、騙された立場であって良かった」「人を騙すような人間は気の毒な人だ」などと、外国人が聞いたら全く理解に苦しむようなことまで言うのです。しかしこれこそ、まさにキリスト教の「敵を許し、愛する」行為そのものなのです。

日本人の精神は実にさっぱりとして、どろどろしたところが余りありません。心に清浄感があるので。こうした日本人の性向は、スピリチュアリズムに照らしてみると、本当に大きな宝であることが分かります。

日本を取り巻くアジア諸国の人々は、いつまでも日本の植民地時代の行為を恨み憎しみを持ち続けてきました。それどころか、子孫にまで憎しみを忘れないようにと教えてきました。その結果、偏狭な民族意識を作り上げることになっています。人の足りなさを許し愛するという「靈的真理」に照らしたとき、わざわざ自らの心を醜くし、靈的成長に逆行するような愚かなことをしてきたのです。

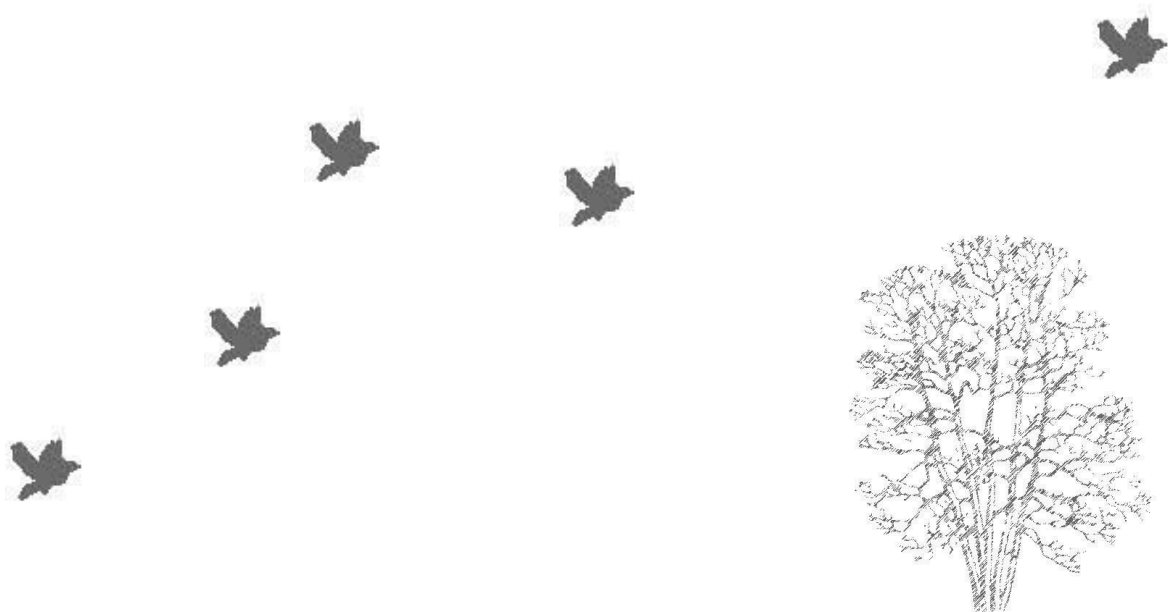
常に周りへの配慮と思いやりを忘れない日本人

日本企業の海外進出に伴い、日本人駐在員の家庭では現地のメイドや運転手を雇うようなことが多くなります。面白いことに現地の人々は、先を争って日本人の家庭で働きたがるのです。彼らにその理由を聞くと、決まって「日本人は優しいから」という答えが返ってきます。主人である日本人は、自分達だけがおいしい物を食べ、メイドに粗末な別の物や残り物を与えるということができません。主人である日本人の方が、メイドにとっても気をつけています。こうしたことは他国の駐在員家庭においては見られません。

全体の和を優先して求める日本人は、極力仲間とのイザコザや争いを避けようとします。何が相手の感情を害することになるかを常に察知し、感情のレベルにおいての不一致や不調和を避けようとします。相手の感情を損なうことがないように常に配慮し、少しでもショックを与えないようにと努めます。そのため日本人は相手に面と向かって反対したり、一方的に命令したり、強く注意することが苦手なのです。相手と激しい議論をすることは極めて不得意なのです。また自分の立場が上であっても、自分の方からわざわざ下に降りていって相手に配慮します。日本の伝統的な社会は外見的には明確な上下関係から成り立っていますが、実質は、相手への配慮

を中心とした平等な人間関係によって出来上がっています。日本人の集まりでは、常にお互いの中で気配りが行き交っています。こうした相手の人間に対する配慮・思いやりは、大半の日本人の心の中に強く根付いています。外国人においては、このような日本人の心の実情をなかなか理解できません。

相手の人間に対する配慮・気配りは、相手への愛の第一歩です。人の感情に鈍感であったり、人の感情を害しても平気な人間は、利他愛を持つことはできません。人の感情の動きを敏感に察知する感性を持ち合わせてこそ、相手の心と深く交わることができるのです。子供の感情の動きに鈍感な母親は、子供の心を理解し深く愛することはできません。日本人は相手がいれば、感情的な部分にまで一致点を求めることを期待するのです。そうしたメンタリティーのために、対人関係は自然と平等になります。主人とメイドの関係であれ、上司と部下の関係であれ、どんな上下関係であっても、愛のあるところには本当の平等が成立しますが、日本人の集まりではそれが当たり前になっているのです。こうした日本人の性向は、スピリチュアリズムに照らしたとき、大きなプラスとなっていることは言うまでもありません。この点においても、日本人は素晴らしい霊的宝を持っていると言えるのです。



高次元のコミュニケーション能力を持つ日本人

日本人は全体の動きに常に気を配り、相手の感情を傷つけることを避けようとします。理屈より感情を重視し、全体の和を優先的に求めます。こうした結果、言葉に対するウエイトが小さくなり、言葉をそれほど重要視しなくなります。言葉よりも、もっとデリケートな感情の世界でのアプローチを心がけます。以心伝心や相手への気配り・配慮といった、より繊細な世界でのコミュニケーションを重視するのです。そうしたことが、心と心の間隔を作り上げる上において大きな働きをすることになります。そして、それが言葉によるコミュニケーションを第一とする欧米人と大きく異なる社会を作ることになり、国際交流が日常化した現代において誤解と摩擦を生むことになるのです。特に外交交渉など、低次元レベルのコミュニケーションや駆け引き(ケンカ)の場にあつては、こうした日本人の言葉軽視の傾向は、決定的にマイナス要因となってしまいます。

しかし、このような言葉以上の世界でのコミュニケーションは、霊的観点から見たとき明らかに優れたものと言えます。日本人同士のコミュニケーションには、霊的要素・テレパシー的要素が多いと言えるのです。地上世界という物質的世界にあつては、以心伝心といった高次元のコミュニケーションより、言葉という物質的で低次元の手段を用いる方が効率的です。物質性の強い低い世界においては、察し合いや以心伝心といった高次元の手段では立ち回りが難しくなるのです。単純な機械類の中では、精密機械は力を発揮できないのと同じです。こうしたことが影響して、日本人は諸外国から外交下手と言われていています。現在の地上世界、特に外交のような世界にあつては、相手を先に思いやるとか、和を求めるといった霊的手段は、残念ながらまだ通用する時代ではありません。政治とか外交といった霊的次元の低い人間の営みの中にあつては、軍事力や経済力とともに、言語という次元の低いコミュニケーション手段が力を発揮するのです。

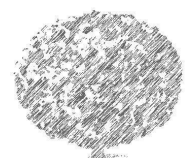
しかし言葉が決定的な役割を果たす現在の地上世界においては、自己の考えを言葉によって表し、意

志を伝える努力をしなければなりません。そうした意識的努力をすることは相手の立場にまで降りていくことであり、“愛の行為”の一つとなるのです。

日本人の「グループイズム」のプラスとマイナス面

これまで述べてきたように、日本人には本来、全体優先・個より公を優先させるという優れた精神的特性があります。しかし、その精神性の中に神や真理といった思想的柱がないため、せっかくの宝は十分な価値を発揮することができません。真理がないゆえに日本人が持つ優れた精神性は、プラスと同時にマイナス面を生じさせることになります。皆で渡れば怖くない式の集団的マイナス行動は、日本人の欠点となります。正義に基づく信念から自らの生き方を選択し、周りの反対と闘っても自分の意志を貫き通すということができません。自分のグループには忠誠を尽くすけれども、他のグループに対しては排他的態度を取るといった傾向が強くなります。外国人はなかなか日本人のグループの中に溶け込むことができませんし、いつまでも外人扱い、よそ者扱いを受けることになります。またグループに対する依存心が強く、他人の顔色を見て自分の行動を決定するということのようなことが起こります。人間としての尊厳性を自ら捨て去るようなことにもなっているのです。

こうした日本人の「グループイズム」におけるマイナス面は、日本人が霊的真理という確たる理念を持つことによって全て解消されることになります。真理を自分の生き方・考え方の基本とすることによって、各自が自信を持って自分の意見を述べ、自分の行動を貫くことができるようになります。霊的真理に立脚した「高次元の個人主義」が確立されるようになるのです。



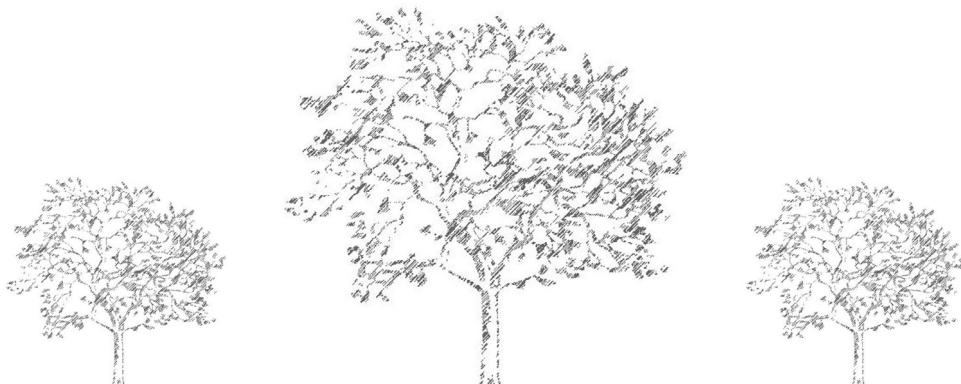
スピリチュアリズムの手本を示すことができる日本人

自己犠牲・滅私奉公・公優先・全体の利益優先・謙虚さ・柔軟な宗教性・相手に対する優しさと配慮・以心伝心という日本人特有の精神性は、スピリチュアリズムの「霊的真理」という霊的中心性が確立することによって、隣人愛・利他的人間関係という理想を地上に展開する強力な手段となります。それによって、日本民族はスピリチュアリズムの生きた見本を、世界に示すことができるようになるのです。スピリチュアリズムを受け入れた日本人ほど、利他愛を容易に実践できる民族はいません。隣人愛の見本を示すことができる可能性を秘めた民族はいません。これほどまでに「利他愛実践」のための恵まれた素質を持った民族は他にはいないのです。これはスピリチュアリズムが世界各国、地球上の隅々にまで行きわたろうとする時代にあって、本当に誇るべき宝を持っているということです。

これまでの地上世界では、物質的な力・知力が威力をふるい、それによって欧米諸国は地上の支配権を握ってきました。欧米人は体も大きく外向的で体力もあり、地上で力を発揮するにふさわしい条件を備えていました。しかしスピリチュアリズムの浸透とともに、内面的な方向へと世界が向かっていくようになります。その時には“愛の力”こそが地上における本当の実力になるのです。力の論理・強者支

配の論理から、愛の論理・一体化の論理・助け合いの論理が支配権を持つようになっていきます。もし日本人がスピリチュアリズムを受け入れることができるならば、日本人はその時、民族主義や偏狭な愛国主義を超越して、人類主義における隣人愛の見本を示し、世界の人々に感動を与えることができるのです。無償の生き方の見本、全体優先の見本、滅私奉公・無私の愛の手本を示すことができるのです。

霊界の人々にとって、「滅私奉公」の精神ほど地上の道具としてふさわしい資質はありません。自己の利益を捨て、大義のために人生を捧げる地上人であってこそ、信頼して使える地上の道具となれます。そういう人間であってこそ、霊界人は思う存分働きかけることができるのです。霊界の道具となることほど、地上人にとって最高に価値ある生き方はありません。経済力において世界を支配するより、霊界の道具として地上の“霊的革命”に参加する方が、はるかに素晴らしいことなのです。かつて国のために特攻隊として命を捧げた崇高な精神を、今度は神のため・人類の霊的進化のために捧げることによって、世界に対する最高の貢献をすることができるようになるのです。「スピリチュアリズム」という明確な方向性と、「滅私奉公」の伝統をつなぎ合わせることができるかどうかが、今後の日本の運命を決定することになるのです。



(3) 日本国家と日本民族の繁栄の道

危機的な状況にある日本

——失われつつある日本人の宝

長い歴史を通して築き上げられてきた日本人の「滅私奉公」という精神的宝は、残念なことに戦後急速に失われつつあります。公的精神は個人主義にとって代われ、自己を全体のために犠牲にしたり後回しにするといった行動は美德とされなくなりました。欧米式の自己主張・自立主義が重視され、各自が自分の利益を求めて思い思いの人生を歩むようになりました。グループに従ったり命令されたり支配されることは、現代の若者の最も嫌うものとなりました。放任主義・自由主義が当たり前の風潮になり、社会的な規制から解放された日本人は、結局、本能的欲求だけに翻弄される人生を歩むようになっていきます。自由放任と欧米式の個人主義が日本にもたらしたものは、本能的快樂主義と精神の頹廢だったのです。

個人主義と自由放任主義によって増幅された「物質中心主義」は、日本人の価値観を根底から変化させました。大半の日本人が、物質的豊かさが幸福の基準であるかのような“錯覚”にとらわれるようになりました。口ではいろいろなことを言っても、本音ではお金と力だけが物を言うのだと思っています。日本人は元来、守銭奴と見られることを最も嫌います。自分一人だけがお金を独り占めすることを恥じらう心を持っています。これは心を物より大切にすることであり、まさに靈的に優れた点と言えます。しかし現在では、物質的・本能的快樂を満たすためのお金を真っ先に求めるのが、大半の日本人の実状となってしまっています。もはや自分のことしか考えない、考えるのは物質的満足と刺激と快樂のみで、獣にも劣る醜態をさらけ出すようになっていきます。

現在の若者の中に、かつての良き日本の精神性を見出すのは稀なことになりました。物質主義の横行は、いかなる国家においても最大の危機状態と言えます。物質主義の影響は、従来の伝統的精神と触

れることのなかった若者においては、特に顕著な形となって現れています。いつの時代にも物質主義に翻弄された人間はいるものですが、現代はその悪化の程度がさらにエスカレートし、しかも全国的に蔓延し、日本人を根底から支配しているということなのです。もっともこうした物質主義的・本能的傾向は、日本に限ってのことではなく、いずれの先進諸国にあっても見られる現象です。地球が小さくなるに伴い、経済発展がどこの国においても程度の悪い物質主義・本能主義を引き起こしています。若者の物質主義化・動物化・快樂主義化は、今や世界共通の現象です。若者の墮落傾向・頹廢スタイルは、万国に等しく見られる要素になっています。まさに「物質主義」が地球上を覆い尽くしているのです。

最近では若者の精神的頹廢に対して、日本の将来を憂える声があちこちから聞こえます。長い歴史を通じて形成された日本人の精神的宝も、崩れる時にはあつと言う間です。精神的な宝というものは、それほどまでに脆いものなのです。ブラジルから来た日系二世は、顔かたちこそ日本人と似ていたり、日本人の血を引いてはいても、心の中身・精神は私達日本人とは全く異なります。彼らの中には、もはや日本人の精神的アイデンティティーのかけらさえ見出し出すことはできません。そしてそれと同様なことが、今、大半の若者の上にも起こっているのです。

残念なことですが、現代の物質主義に冒され、滅私奉公という精神性を失った日本人に対し、靈界の人々は魅力を感じなくなっています。日本人は、靈界の道具としての最高の資質を失おうとしています。

日本の将来を決定する鉄則

自分の国の発展と繁栄を願わない国民はいません。誰もが大なり小なり愛国者としての心を持っています。オリンピックの時期になれば、国民こぞって愛国者となり、自分が民族主義者であったことを実感するものです。日本人であるならば、みな日本が最も偉大な国であって欲しいと思うものです。

スピリチュアリズムの「靈的真理」に照らしたと

き、最も偉大な国とは、世界のために最も犠牲になる国、世界のために最も奉仕する国であるということになります。日本がそうした国家になるためには、国民が自己犠牲を喜んで引き受けられる立派な奉仕性・犠牲的精神を持つことが必要となります。また物より心を重視し、自分達は物質的な生活レベルを下げ質素な生活に甘んじて、それによって余ったお金を持たざる国のために捧げることができなければなりません。世界の発展のためには惜しげもなく、自分の富を差し出すことができなければなりません。そしてそれを国民教育の中心的理念とし、青少年に教えていかなければならないのです。

人生には個人としての生活、家族としての生活、国民としての生活、世界の一員としての生活があり、摂理に順応したり逆らったりしながら生きております。逆らえば暗黒と病気と困難と混乱と破産と悲劇と流血が生じます。順応した生活を送れば叡智と知識と理解力と真実と正義と公正と平和がもたらされます。それが黄金律の真意です。

(シルバーバーチ3・162)

霊界からの働きかけを受けられるところ、霊界の勢力の注目するところに地上の運勢はもたらされます。今後日本人が、かつての精神的宝をいかに取り戻すかによって、日本の命運は決することになります。スピリチュアリズムの「霊的真理」にそった信仰を確立することができるかどうか、これからの発展を決定することになります。物質的な繁栄はいつまでも続くものではありません。時間とともに、地上世界における不公平さは是正されていくようになります。そのとき後に残るものは、霊的真理に一致した「利他愛の実践」だけなのです。

21世紀においては、日本は現在のような経済大国の位置に留まり続けることはできなくなるでしょう。物質主義と利己主義の支配する地上世界にあっ

ては、軍事力と経済力こそが物を言います。幸い日本は、軍事的な力はなくとも経済力に恵まれていたために、世界の中で何とか重要な立場に立つことができました。しかし我が国の人口は21世紀末には現在の半分近くにまで減少する可能性もあり、今のような経済力を維持することは難しくなります。そうなれば経済大国から中級国家に転落していくようなことにもなりかねません。

日本が高級霊の期待に応えられる「地上の道具」としての国民・国家である限り、将来における発展は約束されます。日本民族が「世界人類同胞意識」を持ち、人々のために人生を捧げようとする国民が増えるに伴い、日本国家の国策は世界の持たざる国々への奉仕が中心となります。そうなれば日本は、国家レベルにおいて霊界からの全面的な援助を受けられるようになります。日本国家に対して、人知を超えた貢献の場と地位が与えられるようになるのです。21世紀の日本は、ぜひともそうした方向に進んでいってほしいと願います。物質的には中級国家に転落するようなことがあったとしても、霊的には世界のトップを走り、経済より奉仕を優先する国家的な見本を示してほしいと思います。

日本人でありながら、日本人を超えた歩み ——「スピリチュアリスト」としてのスタンス

現在スピリチュアリズムに導かれた私達のなすべきことは、「霊界の道具」として精いっぱい貢献していくということです。スピリチュアリズムに携わる私達の立場は、ただ日本人の幸せを目的として働くというものではありません。どこまでも地上人類全体に対しての働きかけを担っているのです。私達が今日本にいるということは、スピリチュアリストとして担当する国が、たまたま日本であったと考えべきなのです。目の前の人々を日本人としてではなく、「神の子供・霊的兄弟姉妹」として見るべきなのです。

スピリチュアリズムの唱える霊性進化の道は、あくまでも地上人が個人レベルにおいて歩むべき普遍的道であり、最終的な救いは一人一人に帰着します。自分の霊的成長に対しては、自分自身で責任を持つしかありません。その原則の前には、国や民族という枠は無関係なのです。霊界に行くと、自分の霊的に未熟な部分を自覚するようになります。そして再生の決心をし、自らの霊的成長とカルマを清算するにふさわしい民族・国・親を選ぶことになります。次の地上人生では、今とは全く別の国に生まれるかも知れません。一人一人がこうした霊的サイクルをへて、霊界での上昇の道をたどることになります。従って、現在は日本人であるとしても、そのこと以上に、霊的成長を最重視して歩む「地球人」とあるとの自覚を強く持っていなければならないのです。

どれほど日本の行く末が案じられるとしても、どれほど日本の前途が絶望的であるとしても、そのことだけに心がとらわれてはなりません。私達がどのように頑張っても、すべての人の心を一度に変えることはできません。それぞれが自分の霊的レベルに見合った歩みをするしかないのです。もしある人が無意味な地上人生を送るとするなら、その人は償いとして、それ相応の苦しみを負うようになります。自分で責任を取るようになるのです。

また各自に守護の霊があり、それぞれにふさわしい導きをしてきている以上、ことさら他人の足りなさを嘆く必要はありません。今この時も、人類全体に対する霊界の緻密な計画によりスピリチュアリズムが展開されている以上、日本の行く末を自分なりに心配する必要はありません。自分のできる精一杯のことをしていればよいのです。後は霊界が最も良きように計らってくれるのです。

今地球人類は、すべての惑星世界の中で下から2番目という低いレベルから、徐々に向上の道を歩み始めようとしているところです。その霊的進化は、スピリチュアリズムによってなされようとしていることを忘れてはなりません。スピリチュアリズムは地球全体の運命を担って働きかけているのです。日本という国家は、そうした地球のほんのわずかな地

域に過ぎないのです。

人類全体のための予定表というものがあります。私の世界の高級な神霊によって考え出されたものです。その目的は、受け入れる用意のできた地上の人間を霊的に、精神的に、そして身体的に自由にしてあげることです。国家単位の計画があり、個人単位の計画があります。

(シルバーパーチ10・147)

地上の皆さんは、ひたすらに真理を広め、知識を広め、叡智を広め、光明を広め、一人でも多くの人の心に感動を与えることです。往々にしてその努力の結果はあなた自身には分からないでしょう。が、それはどうでもよろしい。かまわず進んでください。世間の批難、中傷にはかまわず、ひたすらにご自分の心の中の光りに忠実に従うことです。それ以上のことは要求しません。敵対するものがいかに大きかろうと、最後は必ず勝利を収めます。

(シルバーパーチ3・31)

世界にスピリチュアリズムが広がり、地球人としての意識が共通のものとなった時には、国家自体の在り方が今日とは随分変わっているはずですが、国境は現在の県境ほどのものになっていることでしょう。その時には、民族性・国民性にこだわることは時代遅れであり、「世界同胞意識」が民族意識や愛国心に優るようになっていくはずですが、

ある民族や特定の国が世界の運命を決定していくのではなく、無国籍の「スピリチュアリスト」が世界を変えていくことになるのです。



未来の地球とスピリチュアリズム

最近のすさまじいIT技術の進歩を見るにつけ、この先、地球はどのように変化していくのか、またどこまで変化していくのか考えざるを得なくなります。100年後には全ての分野でコンピューター化が完成し、今とは想像もつかないほどの大きな変化を遂げていることでしょう。その差は西暦2001年の現在と、200年前の江戸時代後期との違い以上かも知れません。そのとき人々は、一体どのような日常生活をしているのでしょうか。そこではスピリチュアリズムは、どのような形で人々の中に浸透しているのでしょうか。現在の地球が抱えている、戦争・貧困・人口・食料・環境などのさまざまな問題は、果たして解決しているのでしょうか。

ここではシルバーパーチの靈訓を手掛かりにして、さらに遠い未来に視点を合わせ、500年以上先の地球を予測展望してみたいと思います。

(1) これまでの「物質文明」と「精神文明」の関係

現在、地球上で急速に発展している科学技術は、すべて「物質文明」であるということをまず確認しておかなければなりません。シルバーパーチはこれまでの人類史を振り返って、次のようなことを言っています。地上の人間が霊体と肉体から成り立ち、霊的成長と肉体の成長があるように、地上世界にも「精神文明」と「物質文明」という二つの発展・進化があります。本来この二つの発展は調和を保って進むのが理想なのですが、実際には、人類は物質文明のみを異常に発展させてきました。精神文明はその物質文明のスピードについていくことができず、現在の地球は物質文明が支配する世界となり、「物質主義」が横行することになってしまいました。そ

れが「利己主義」という最悪の結果を作り出してしまったのです。

今、地球上で人々の関心を引き付けているコンピューター・インターネット・ITなどは、すべて物質文明の延長上にあるものです。こうした物質文明によって私達の生活は大変便利にはなりましたが、その一方で精神文明の発展を阻害するような状況も生まれています。地球の行く末を心配する多くの人々は、ますます大きくなる物質文明と精神文明の溝を前にして不安を抱えています。

(2) 地球上の物質文明の行方^{ゆくえ}

科学技術は、人類に便利さと快適さをもたらすことを目指して発展してきました。さらなる豊かな物質的生活が、科学技術の目標となっています。では、この便利さ・快適さの究極点とは何なのでしょう。それが明確になれば、何百年先の物質文明の姿を予測することができるかも知れません。

しかし重要な結論を先に言えば、地上という物質世界はどこまでいっても、あらゆる点で霊的世界を越えることはできないということです。

将来における移動にともなうスピード化

地上世界は時間と空間の制限下にあります。一方、霊的世界には物質世界のような時間と空間の制約がありません。霊界では思うだけで瞬時に移動することができます。それは地上の時間・空間の観念からすれば、時空が存在しない世界であると言えます。ここ200年間、地上の物質文明は人間の移動時間を驚異的に短縮してきました。それ以前と比べれば、奇跡と思えるほどの進歩をなしてきました。しかし、そうした現代における移動のスピード化も、霊界に

比べればとても比較にはなりません。地上の物質文明は無意識のうちに霊界を目標にし、これに近づこうとします。従って今後、地上の科学技術は、さらに速くという方向に向かっていくことになります。地上人類は時間と空間の壁の中で、よりいっそう移動にともなう時間の短縮を目指して進んでいくことになります。

とは言え、地上世界では時間と空間という壁がついて回る以上、どれほど頑張っても霊界のレベルにまで至ることはできません。SFまがいの異次元空間をへて瞬時に移動するようなことは実現しないでしょう。地上人生の最も重要な目的が「霊性の向上」にあることを考えると、そこまでの時間短縮・スピードアップの必要性はないからです。

将来における情報と意志の伝達

霊界では自分の意志が周りの人々に瞬時に知られるようになっていきます。また高級霊であれば、他の人の隠された過去のデータもすべて知ることができます。必要な時には、自分の意志や考えを、霊界の隅々にまで正確に伝えることができます。霊界における意志の伝達は完璧であり、それによって広大な組織が一条乱れず統制されるようになっていきます。地上の情報システムは、こうした霊界での完璧な情報システムに近づこうとします。

ここ数年の間に急激に進んでいるIT革命は、霊界の情報伝達に近づく第一歩と言えます。現在、地上世界でその中心的役割を果たしているコンピューターは、どんどん小型化・軽量化され性能がアップします。そして持ち運びが自由になるのはもちろんのこと、その操作も極めて単純化され、思念や音声によって操作がなされるようになっていきます。

ただし未来においては、高い霊性を持った地上人が多く現れるようになり、“テレパシー”による交信がかなり自由に行われることになるでしょう。身近な人や愛情で結ばれた人とはテレパシーによる交信が主流となり、縁の薄い人との交信手段として、今述べたような方式が用いられることになるでしょう。

将来における言語の壁

霊界には言語の壁は全くありません。すべての思いがテレパシーで正確に伝えられるからです。地上の言語は実に不便で性能の悪い伝達手段であり、特に外国人とのコミュニケーションの際には、言語の違いが大きな障害となります。

将来においては一つの地球共通語が使用されるようになり、これによって言語の壁が乗り越えられるようになるかも知れません。あるいは高性能の携帯通訳機と翻訳機が活躍し、この問題が解決されるかも知れません。その場合には通訳機の性能は現在のものとは比べ格段の進歩をしており、母国語のニュアンスまで正確に表現できるものになっているはずで、こうした機器によって言葉の壁がなくなるのは、それほど時間のかかることではないと思われます。また会話だけでなく読み書きも、高性能の翻訳機によって自由自在にできるようになるでしょう。未来の世界では、現在のように外国語の習得に膨大なエネルギーを傾ける必要はなくなります。そして人々は、そのエネルギーの大半を「霊的成長」に直結することに向けるようになります。

将来におけるエネルギーの問題

現代の地球における深刻な問題はエネルギーの問題です。将来は石油や石炭といった化石燃料は完全に姿を消し、クリーンなエネルギーとして水素を活用したエネルギーの確保がメインになるでしょう。海水から取り出す水素によって必要なエネルギーが確保されるようになると思われます。さて霊界では必要なエネルギーは環境中から取り入れます。神のエネルギーを、霊界の空気層に相当する環境から取り入れます。従ってさらに遠い将来の地球では、これに最も近い形でエネルギーの確保が行われるようになると思われます。それは太陽光からエネルギーを効率よく取り入れ、これによって必要なエネルギーをすべて賄う^{まかな}ということなのです。

物質文明の進歩の限界点

地球における物質文明は、以上述べたように、霊界の諸状況に近づくような方向で進歩・発達していくことになります。そして、それは物質世界における限界点にまで進んでいくことになります。物質世界では物質の持つ性質上、おのずと限界があり、無限の発展ということはありません。地上世界は神によって人類の霊的進化の訓練場所として造られている以上、その目的にとって必要のないレベルにまで物質文明を引き上げる意味はありません。

霊的な覚醒を得た人類は「霊的成長」にのみ意識を向けるようになっていくので、むやみに物質文明の発展を求めることはなくなります。将来、物質文化は精神文化のために存在するものであるとの認識が行きわたれば、霊的成長にとって必要以上の物質的なものを求めることはなくなります。そして誰もが、物質に対しては最少限度の関心を向けるのみとなります。霊界の人々の意識は霊的成長に係わることで占められていますが、未来の地上人においても、その意識は常に「霊的成長」に向けられるようになるのです。

(3) 地球上の精神文明の行方

以上が未来の地球における「物質文明」の様子です。次に未来の地球における「精神文明」の様子を見ることにします。

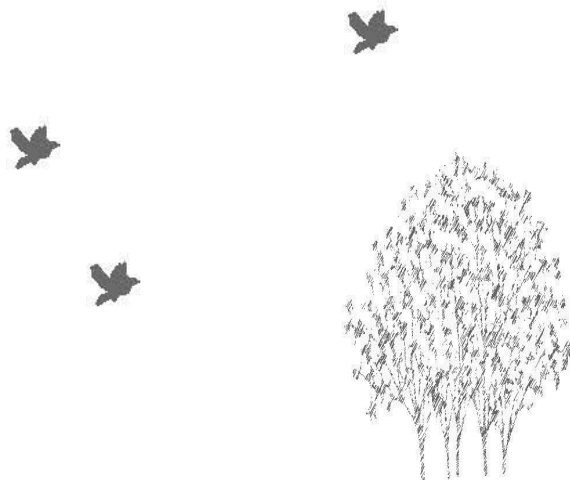
精神文明とスピリチュアリズム

これまで精神文明は物質文明の進歩のスピードについていけず、ノロノロとした歩みをしてきました。しかし精神文明の進歩が停滞していたわけではありません。地上世界が物質文明に席卷されてしまいそうな時には、霊界からの働きかけによって新たな宗教が興され物質文明への対抗手段が取られたり、霊的な啓蒙活動が展開されてきました。そうした霊界からの働きかけの中で人類史上最大の出来事が、2000年前のイエスの誕生であり、1848年に始まるスピリチュアリズムの勃興でした。

何度もこのニューズレターで述べましたが、スピリチュアリズムは地上人類救済のための霊界あげての大プロジェクトです。人類史上最大規模の、霊界からの計画的・組織的な浄化運動です。これはイエスを総司令官とする何百億という霊界の高級霊が、一糸乱れぬ組織体を構成し進めているプロジェクトです。スピリチュアリズムの目的は、地上に「霊的真理」をもたらし、人類に霊的人生を歩ませ、地上ばかりでなく霊界における救いまでも与えようとするものです。それはこれまでの人類史上、あらゆる宗教が目指してきた霊的救いを最終的に成就させるという目的を持っています。スピリチュアリズムは、まさに地球上の精神文明の中心的担い手なのです。

霊的真理が地上人の「常識」となる

スピリチュアリズムの大計画は、今この時も着々と進められています。そして霊的真理が地上世界に普及する態勢はすでに整い、時間とともに地球の隅々にまで普及していくことが確実になっています。従って未来の地球上では、スピリチュアリズムによる霊的真理は間違いなく人類の常識となっているはずで、ここ100年の間に急激に進歩・高度化した通信手段によって、スピリチュアリズムは急速に地球上の人々に知られるようになっていきます。将来においては、神の存在を否定したり、死後の世界の存在を認めない人間はいなくなります。霊的真理・霊的事実が地球上の人々の「常識」となるのです。



淘汰されていく地上の宗教と思想

当然のこととして、スピリチュアリズムが普及するに伴い、現在地上に存在している全ての宗教は衰退し、あるいは滅亡し、かつての宗教の遺物として知られるだけの存在になっていきます。地上のあらゆる宗教は「霊的真理」という事実によって自動的に淘汰されたり、吸収されることとなります。霊界においては（*幽界の一部を除いて）、地上のような宗教は存在しません。遠い将来の地上世界は、こうした霊界と同じような世界になっていきます。現在見られるような宗教組織は一切存在せず、神によって特別に選ばれたと自称する教祖などはいなくなります。地上人類は神を共通の親として仰ぎ、神のもとにあって等しい子供達であるという認識が行きわたるようになります。

また哲学や思想も、宗教と同様の道をたどることになり、すべてが霊的真理のもとに一元化されるようになります。霊性の乏しい中で、理性だけによってこねくり回すような複雑でしかも事実からほど遠い観念の遊びは、地上から姿を消すこととなります。

「霊的真理」が従来の宗教や道徳・思想という形を離れ、誰にでも分かりやすいシンプルな常識として定着するようになるのです。

各民族の伝統的文化的行方

各民族に伝えられ保持されてきた伝統的な文化も、霊的真理に合ったものだけが、真理のバリエーションの一つとして残されるようになります。もしそれが霊的真理から懸け離れているならば、自動的に淘汰されることとなります。従って伝統的日本文化においても、あるものは生き残り、あるものは姿を消すこととなります。

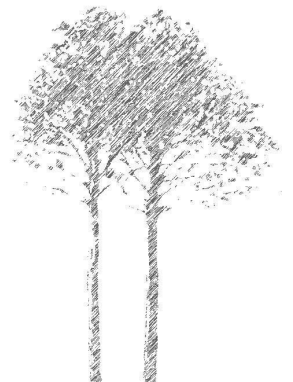
人々の関心は霊的進化にプラスとなるものだけに向けられ、それと無関係なものとは係わりを持たずとしません。霊的成長と何の関係もないようなものは、たとえどれほど長い伝統を誇っていても不必要なものとして扱われます。現代の地上世界では、歴史的遺物や建築物、遺跡などが重要視されています。しかし未来においては、人類の霊的進化に役立たないも

のには重要性が認められなくなり消滅することになるのです。現在文化財として価値が認められているような仏像・建築物であっても、単なる物質に過ぎないものとして捨て去られることになるのです。

霊性の進化した人類の登場と、霊界との日常的交流

現在スピリチュアリズムの名のもとに進められている霊的真理普及の大事業は、今後の地上人類の精神世界を根本から変化させることとなります。宗教・思想といったこれまでの精神文化の担い手は、淘汰されたり、あるいは霊的真理の中に吸収されることとなります。

こうした精神文化の根底からの変化と同時に、もう一つの重要な動きは、霊性の進化した人々が徐々に増えることにより、霊界との触れ合いが緊密なものになるということです。霊界の高級霊と霊通したりインスピレーションを豊富に受けたり、あるいはテレパシーを自由に使いこなしたりすることが現実のものとなります。天才と言われるような人間が数多く現れ、こうした人々によって霊界との交流が日常レベルで展開され、霊的世界は身近なものになります。また天才達によって、霊界に一步近づいた芸術や音楽が花開くこととなります。地上世界からは物質主義支配の暗い雰囲気は一掃され、「霊的真理」によって営まれる明るい人間社会が実現することになるのです。



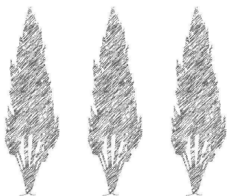
将来における動物との関係

靈的真理の普及に伴い、動物への虐待や肉食の習慣はなくなり、人間と動物はただ愛の関係においてのみ結ばれることとなります。動物にとっても人間にとっても、お互いの存在が喜びと幸せを分かち与え合う関係を作ることとなります。その時には、20世紀の地球において“肉食”という野蛮で救い難い悪習慣が公然と行われていたことが、呆れられるようになるはずで

将来における健康と医学

現在のような間違った食事やライフスタイルによる病気は、「霊主肉従」の価値観が浸透するにつれ追放されることになるでしょう。現代人の病気は、心身関係の異常、精神状態の異常と過剰ストレス、不自然な食生活、運動不足、休息の欠乏によって引き起こされています。しかし靈的真理の普及によって、心身の状態や日常生活はおのずと調和の取れたものに変化していき、多くの現代病は姿を消すこととなります。とは言え、カルマによって引き起こされる病気は消滅することはなく、依然としてそれに苦しむ人々も存在します。

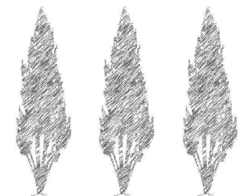
未来では、心霊治療・精神療法・免疫療法などが医療の中心を占め、現在のような唯物医学に基づく不自然な臓器移植・遺伝子治療などは行われなくなります。おそらく平均寿命は100歳以上に延びることになり、死ぬまで高い健康状態を保つ人々が大半となることでしょう。また医学が靈的真理と一致することにより、医者自身が霊界の存在を前提として医療を施すこととなります。医学の中に“死”が自然な現象として認識され、親しい者の死を、誰も悲しむことがなくなります。死はあの世への喜ばしい旅立ちとして、祝福されるようになるのです。



(4) 利己主義支配の世界から、 利他主義支配の世界へ

現代の地上世界は、人間の無知が作り出した「物質主義」と「利己主義」によって支配されています。大半の人々は、何といても最後はお金と権力が物を言うと考えています。それが現在の地球上のすべての悲劇・矛盾を生み出すことになっています。戦争・暴力・圧政・非道な支配・人種差別・貧富の拡大・階級差別・飢餓・さまざまな病気・動物虐待など、みな物質主義と利己主義が原因となって引き起こされたものです。そしてそれを突き詰めていけば、「靈的真理」を知らないという一点に行き着きます。真理がないために死後に待ち受ける霊界の存在を知らず、利己的な生き方がどれほど大きなマイナスを引き起こしているのかが分からないのです。そして、そこからあらゆる悲劇・矛盾が生み出されているのです。スピリチュアリズムによる靈的真理の普及によって、こうした地上人類の根本的な問題がすべて解決されることとなります。

未来のある時をもって、地上世界は人類史上初めて、利己主義の支配から利他主義の支配へ移行することとなります。利他主義が地球上のすべての人々、すべての国々において中心的意識となります。「利他主義」が地球上の全人類共通の指導理念となり、現在地上に存在するさまざまな問題は姿を消すこととなります。神の等しい子供という共通認識のもとに完全な平等主義が実現し、強者支配の論理は消え去り、強い者が弱い者を助けるのが当たり前となります。“愛の人格”こそが真の力と見なされるようになり、それが人の上に立つ資格とされるようになります。与えるものが多いからこそ、仕えることが多いからこそ偉いという、聖書の世界が現実のものとなります。



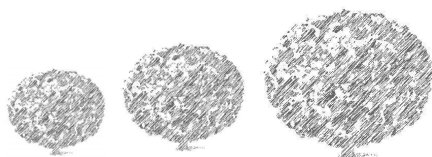
「靈的成長」が阻害されないような 社会システムの確立

物質的条件によって、人々の靈的歩みが阻害されることがないような助け合い（互助）のシステムが出来上がります。現在の地上世界では、衣食住などの基本的物質の窮乏によって、精神の進歩すら後回しにされる悲惨な現状があります。最低の物質を欠くために、「靈的成長」のチャンスを奪われている多くの人々がいます。

しかし遠い将来には、地球上のすべての人々に、靈的人生を歩む上での最低の物質が保証されるようになります。そのための地球規模の互助の仕組みが出来上がっています。さらに「靈主肉従」の意識が徹底し、生活の糧を得るために仕事に忙殺され、人生の大半の時間とエネルギーを費やすというようなことは一切なくなります。仕事は靈的人生を歩む上での他人への奉仕であり、その報酬によって物質的なものが与えられることとなります。また肉欲や本能を刺激して「肉主靈従」に貶めるようなものは、社会から追放され存在しなくなります。

将来における国家間の関係

未来においては、現在のような国家は不必要になり、国境の壁はほとんど無きに等しいものになっていることでしょう。世界中の国々が、現在のEU諸国よりももっと自由に気軽に行き来することができるようになり、地域連合のような形式がメインになることでしょう。しかし地域性や文化的特徴はある程度まで残ることになります。そのときには現在の地球のような、領地を巡っての争いは完全に消滅します。地球はすべての人間が靈的成長をなすための「一時的な訓練場」であるとの意識が定着し、地球は個人の所有物ではなく、神のものであるとの認識が常識となるからです。



人類の靈的成長に貢献する経済システムの確立

物質的快樂だけを追及するような状況はなくなっているため、経済活動は現在のようなエゴ剥き出しの在り方とは根本的に変化しています。経済活動の目的は、利潤を上げることに以上、人類の靈的成長にとって必要な最低限の物質を確保するための営みとなります。各自の仕事は人類の靈的成長に貢献するための務めとなり、奉仕の行為としての位置付けが明確になるでしょう。当然のこととして、環境に配慮した循環型の経済システムが地球規模で確立されることとなります。

このように未来の地上世界は、人類が靈的成長をなし、靈界への準備をするにふさわしい場所となるのです。靈的成長のための物的な障害は消滅し、本人の意欲いかにて靈的進化の道を歩むことができるようになります。

(5) 未来の地上人にも避けられない こと——地上世界ならではの 苦しみ・悩み・克己的努力

以上のように未来の地球を概観してみると、それはまさに地上の天国・理想郷のように思われます。このような理想世界が実現するなら、未来の地上人（*私達も再生してその一員となっているかも知れません）においては、一切の苦しみ・悩みから解放されているのでしょうか。確かに今の地上世界からすれば、未来の地球は理想郷と言えるでしょう。そしてそこでは、現代の地球が抱える無意味な問題、無知から出た不必要な苦しみはなくなっているはずですが。

しかし地上世界である以上、人々は依然、物質世界ならではの苦しみ・悩みを持ち続けることとなります。神はこの地上世界を、苦しみを通じて靈的に成長していく所として創造されました。従って地上では、常に何らかの苦しみや困難に遭遇することになるのです。もし何一つ苦しみがないとするなら、それは神の意図から外れたことであり、最も大切な「靈的成長」を得られないということになります。地上世界においては誰一人例外なく、克己奮闘の努

力が必要とされます。未来の世界にあってもそれは同じなのです。地上世界ならではの苦しみ・悩みからは逃れられないのです。

未来において付いて回る宿命を、以下一つ一つ述べることにします。

人間関係のトラブルと「愛の訓練」

霊界と地上世界の大きな違いの一つは、霊界では同じ霊的成長レベルの人間同士の生活が営まれているのに対し、地上世界ではさまざまな霊的レベルの人間が地球という同じ物質レベルの場所に同居しているということです。霊界では霊的レベルによって明確な住み分けがなされ、上下の界層（階層）間では普通は交流はありません。そこは霊的感性の一致する者だけが集まる純粋な愛情によって結ばれた世界であるため、地上的な人間関係のトラブルなど一切ないのです。

一方地上では、さまざまに異なる霊的レベルの者が同一場に住んで交流しているため、お互いの意見の食い違いや不理解などといった多くの深刻な問題が生じます。実はこれこそが、神が地上世界を魂の訓練場・カルマを切る修行場としたことの意味だったのです。人間関係において必ず支障が生じるようになるというのが、地上世界の宿命なのです。それによって、誰もがその人なりの苦しみを体験するようになります。

地上人の間には、種々異なる上下関係が存在します。いずれの場合も、下の者は上の立場の者に対して自分を抑えコントロールしなければ関係を維持することはできません。そのためには自分の心や視野を変えなければなりません。すなわち立場は下であっても、相手に対して寛容さを持ち、広いところから相手を眺めなければならないということです。また上の立場に立った者は、自分の利益追及を後回しにしなければなりません。先に自分が犠牲になり、先に相手の利益と幸せを願わなければなりません。先に自分の方から愛さなければならないという利他愛の在り方を、身をもって体験するようになるのです。

地上世界は、さまざまな霊的レベルの人間が同居することによって成立している厳しい「愛の訓練場」なのです。人間関係を通じて苦しみ・悩み、それによって霊的成長をなすというのは、現代に生きる私達も、未来に生きる人々も全く同じなのです。スピリチュアリズムが世界中の常識となった後にも、依然つきまとう地上人としての宿命なのです。

「霊主肉従」の自己克己の努力

霊界と地上世界の大きな違いは、霊界人には肉体がなく、地上人には肉体があるということです。地上に住む以上、この肉体という道具なしに生きていくことはできません。すでに繰り返しニューズレターで述べましたが、地上人が霊的成長をなすためには、まず第一に霊優位の生き方をすることが必要です。すなわち「霊主肉従」の状態を保つことが大前提となります。霊による肉体の欲望のコントロールということですが、この霊主肉従の努力を欠いたところでは霊的成長は望めません。それでは、せっかくの地上人生を無駄に過ごすことになってしまいます。物質世界というコントロールが極めて難しい世界で、意志の力を振り絞り自己コントロールする体験を通じて、霊的な力は高められます。

地上人としての努力の出発点は「霊主肉従」という本能・物欲のコントロールにかかっていますが、これは現代人においても未来の人間においても同様です。地上人として肉体を持つ以上、避けられないことなのです。外部の物質的環境がどれほど快適になり便利になったとしても、この内面の闘い・克己の努力から完全に逃れることはできません。



肉体管理の必要性

肉体という地上の道具は、自分自身で管理を心掛けない限り、健全さを保つことはできません。怠惰な生活をし、飽食に走り、肉体の手入れを怠れば病気になる——これは地上人につきまとう宿命です。未来の地上人においても、肉体の管理は避けられません。医学は今とは比較にならないほど進歩しているはずですが、肉体の健康を維持する原則は変わりません。

健康であるための原則は次のようなものです。「霊主肉従の状態により霊的エネルギーが満たされている」「精神レベルでの調和が保たれている」（精神的ストレスをコントロールし感情が安定している）「正しい食生活をしている」（飽食をしたり不自然な食べ物をとらない）そして「適度な運動を欠かさない」「適切な休養をとる」ということです。これらが、肉体を健全に保つための正しい手入れということになります。

人間には健康を守るためのシステムが与えられています。その仕組みによって、肉体を不自然に使い手入れを怠れば、痛み・苦しみという警告信号が出されます。未来の人々はこうした肉体に備わった自然のサインに注意を払い、肉体の摂理に忠実な生き方をするようになるでしょう。

また肉体の健康を保つためには、いつになっても運動を欠かすことはできません。適度に運動してこそ健康が維持されるように造られているからです。しかし必要以上に肉体を酷使し、痛み付けることは何のプラスにもなりません。従って肉体をギリギリまで酷使する現在のようなプロスポーツやオリンピックは、地上から消え去るものと思われます。将来においては、肉体を壊してまでスポーツをするのは愚かしいことと見なされるようになるからです。

スピリチュアリズムによる霊的真理の普及によって、500年先には、肉食に代表されるような狂った食習慣は正され、大半の人々は菜食主義者になっていることでしょう。

「カルマ」による苦しみ

前世で作った悪いカルマ（悪因縁）を償うために、誰もが地上人生において苦しみや困難に遭遇します。その苦しみ・困難は、本人が地上に再生するに先立って自分自身で選んだものであり、それが地上人生のある時期に必ず生じるようになるのです。

こうしたカルマ清算の法則は、未来の地上人にもそのまま当てはまります。私達も将来、再生の人生を歩むことになるかも知れませんが、その時も、カルマを償うための苦難に遭遇するようになるということです。具体的にどのような苦難が生じるようになるのかは分かりませんが、「カルマの法則」（因果律）によってそれが起きるのは、未来の人々にとっても避けられない事実なのです。

「祈り・瞑想」の必要性

人間にとって、霊的エネルギーを取り入れるために祈りや瞑想は欠かせません。地上世界にあっては、肉体が霊に対する最大の障壁となっているため、どうしても意識的に霊的エネルギーを取り入れる努力が必要とされます。

そのことは、遠い将来の人々にも当てはまります。未来においては「祈り・瞑想」の重要性は常識となり、毎日の食事と同じような中心的日課となっているはずですが、また人類全体の霊的レベルが向上しているため、現在とは比較にならないほど、祈りや瞑想の環境が整っているものと思われます。高次元にまで進化した物質文明の中で、人々が絶えず祈りや瞑想をするといった光景が当たり前ものとなっていることでしょう。高度に進んだ「物質文明」と深い「精神文明」が、見事に共存するようになるのです。

このように考えてみると、未来の地上世界に生きる人々も、結構大変なんだということが分かります。それは地上はどこまでいっても修行の場であり、苦難の体験を通じて霊界での資質を磨く所だからです。未来においては物質次元での問題はかなり解決され、現在のような無駄な苦しみはなくなっています。しかし個人個人にあっては、地上ならではの間

題、靈的成長のための努力はどこまでも続くこととなります。未来の人々も肉体を持って物質世界に生きる以上、現在の私達と同じように、さまざまな悩み・苦しみに遭遇し、克己奮闘しなければならないということです。

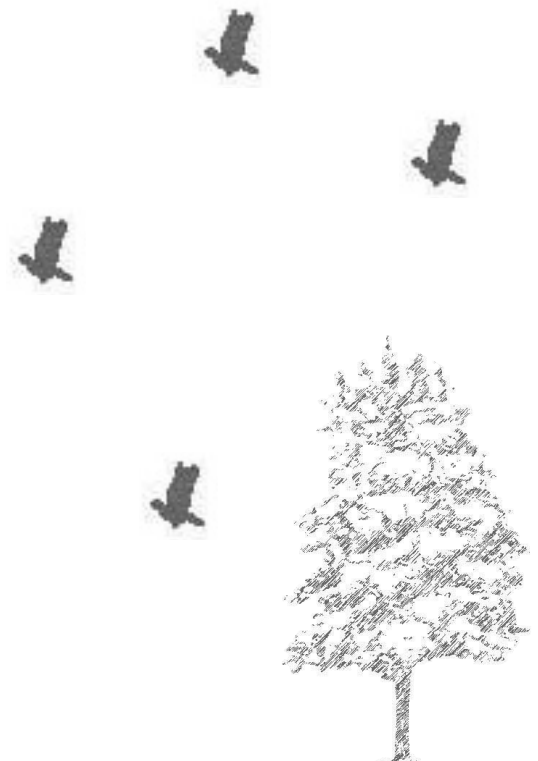
(6) 21世紀のスピリチュアリズムの進展

以上、未来の地上世界を概観してきました。最後にこれから100年間の「スピリチュアリズム」の進展状況を見ていくことにしましょう。今からの100年間は、地球上にこれまで存在していた諸問題が、徐々に解決されていく時代です。地球上の変革はゆっくりとしたスピードで進んでいきます。とは言え、すべてが同じスピードで変化していくわけではありません。霊界からの働きかけによる世界レベルでの靈的啓発の動きは活発となり、これが地上に反映して、社会的な改革が少しずつ進展していくようになります。しかし紛争・戦争は依然として世界の各地で続いていきます。靈的真理の影響力が、まだそれらを抑止するほどには大きくなっていないからです。21世紀には、物質文明はさらに急激なスピードで進歩することになるでしょう。しかし、まだまだ発展の限界点近くまで到達することにはなりません。

精神文明の表面上の変化は一見ゆっくりとしたものに映りますが、霊界におけるスピリチュアリズムはすさまじい勢いで進展していくこととなります。21世紀における精神文明の発展とは、一言で言えば、霊界からの働きかけによってさまざまな分野で靈的意識が覚醒され、スピリチュアリズム浸透の地上的準備が急ピッチで進んでいくということです。スピリチュアリズムによる「靈的真理の普及」に加速度がつき、それに応じて地球上の既存の宗教は大きな衝撃を受けることとなります。けれども、これまでの宗教が完全に突き崩されるまでには至らないでしょう。既成宗教サイドからのスピリチュアリズムに対する反発は当然起こりますが、それが大きな勢力になることはありません。

21世紀の精神的世界の底辺は、すべて「スピリチュアリズム」や「ニューエイジ」によって進展していくようになります。スピリチュアリズムの普及は、時期のきた一人一人に靈的真理が受け入れられることによって進んでいくため、そのスピードはそれほど増すことがないように思われるかも知れません。しかし現代科学による通信情報機器が、そのための大きな貢献の役割を果たすこととなります。

先進諸国を中心として、スピリチュアリズムやニューエイジの靈的文明が徐々に市民権を獲得していくようになり、21世紀の遅くない時期に、世界的にスピリチュアリズムが主要な思想・信仰の位置を占め始め、全世界に大きな影響力を持つこととなります。21世紀中に、心霊世界を信じる人々の数は、信じない人の数を凌駕するようになります。21世紀の後半には、スピリチュアリズムやニューエイジの影響によって、従来の伝統宗教の崩壊が明確になってくるでしょう。イスラム教は物質文明の導入に伴い内部から崩れ始めますが、世界の主要宗教の中でスピリチュアリズムを受け入れるのは、イスラム教圏の国々が最も遅い時期になるでしょう。



(7) 21世紀の日本の状況

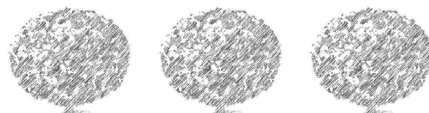
20世紀は、アメリカという超大国の絶対的優位の中で終わりました。圧倒的な軍事力と経済力を背景に、強い政治力を発揮し、ありとあらゆる分野において世界をリードしてきました。日本にとってもアメリカは最も関係の深い国であり、善きにつけ悪きにつけ、アメリカの影響をストレートに受けてきました。しかし、こうしたアメリカだけの突出した絶対性や繁栄はいつまでも続くものではありません。もちろん21世紀においてもアメリカは世界のリーダーの立場を演じることにはなりますが、徐々にその力は後退していくようになります。一国だけが物質的繁栄を享受することは「霊的摂理」に反するからです。

アメリカに次いで、21世紀の日本に大きな影響を与えることになるのは中国です。中国は日本にとって最も警戒を要する危険な国です。軍事力という腕力を背景にして全てを進めようとする中国は、現在の国際社会にあっては、まさに新興のギャングのような存在です。ひたすら軍事的拡大に奔走し、世界に覇権を確立しようと野心を燃やしています。現在の中国は、地上の国家の中で、霊界から最も遠い国の一つとなっています。しかし、こうした中国の軍事的脅威もさほど長く続くとは思われません。現代の中国は実質的に資本主義化しており、人々の物欲をめぐるエネルギーは、もはや軍事力では統制できなくなりつつあります。そうした中で、それほど遠くないうちに、中国の社会主義独裁体制は内部から崩壊することになります。そのとき中国が、旧ソ連の崩壊時のように多くの国家に分裂するようになるのか、あるいはもっと大きく北と南に二分されるようになるのかは断定できませんが、いずれにせよ中国が崩壊するのは時間の問題なのです。また現在の中国政府がやっきになって阻止しようとしている台

湾やチベットの独立も、そのとき自動的に達成されるようになるはずですが。

これまでの地上世界は、「物質主義」と「利己主義」の支配下に置かれてきました。そのため腕力（軍事力）と金（経済力）が最も力をふるってきました。特に軍事力は地上世界にあっては最大の権力となってきました。国際関係においては、何といても軍事的な力関係が決め手となります。日本のようにいくら経済力があっても軍事力を発動することができなければ、喧嘩（ケンカ）が日常化している現実の世界の中では、自己の立場を主張することはできないのです。国際会議で日本が意見を主張しようとしても、まともに相手にしてはもらえません。ケンカをひたすら避け、ケンカから逃れようとする一方でお金だけ持っているとなれば、誰もが日本にお金をたかろうとするのは当然です。国際社会の中で現実に、日本はこれまで“金づる”としてのみ見られてきました。お金を出させるために利用され、それだけを期待されてきたのです。

日本憲法に基づく戦争放棄は霊的観点に立てば立派な理想ですが、ケンカが日常茶飯事の世界にあっては単なる理想論にすぎず、現実的ではありません。もし崇高な理想を貫こうとするならば、最後は理想のために国家が減ぶことがあっても仕方がないという覚悟が要求されるのです。そこまでの現実的な決意があって、初めて可能になることなのです。国家が減ぶのはイヤ、でもケンカはしたくないというのであれば、腕力のある人間（強い国）の手下になって言いなりになるしかありません。これが戦後から今日までの20世紀後半の、日本とアメリカの関係だったのです。軍事力がない限り国際社会でリーダーシップを取ることは現実にはできません。他国の戦争を止めさせることもできません。口出しをすれば却って馬鹿にされるだけなのです。



しかし21世紀には中国の崩壊などの国際状況の変化に伴い、経済力が軍事力よりも優先されるようになっていきます。ケンカばかりしていることができなくなって、世界レベルにおいて軍事力が後退するようになり、経済力が国際社会で大きな力を持つようになります。そうなれば軍事力を持たず経済力だけを持つ日本にとっては力を発揮するチャンスが多くなり、国際舞台での発言力が増すこととなります。その意味で、日本にとって21世紀は有利な時代と言えます。とは言え、日本が現在の経済力をいつまでも維持できるとは限りません。人口減少が急激に進行し、道徳的退廃が進むにつれ、国家の活力は低下します。21世紀の末には、現在の経済大国から単なる先進国の一つに凋落^{ちようらく}することも考えられます。

けれども日本が国家の方向をスピリチュアリズム

と一致させ、経済大国から「奉仕大国」へと変身することができるなら、世界に対する大きな国際的立場と役割を与えられることになるでしょう。たとえ経済的には後退して1.5流になったとしても、霊的には一流国家として、最も栄光ある立場に立つこともできるようになるのです。日本が世界に先駆けて、「スピリチュアリズム」の国家的見本を示すことができるのなら、そのとき日本は世界の人々から尊敬され、真の意味でのリーダーと見なされることになるでしょう。国策がスピリチュアリズムと一致するならば、霊界からの全面的な働きかけを得られるようになり、世界の中における重要度を急激に増していくこととなります。それに伴い世界中の人々から、心からの敬意を受けられるようになるのです。



ニューズレター発行の目的について

ニューズレターを手にした多くの方々から、「このニューズレター発行の目的は何ですか」との質問が寄せられています。今回はそれについて、私達の見解を述べたいと思います。

ニューズレターの発行は、当サークルでの一つの奉仕

多くの方々から、よくニューズレターに対する資金援助のお申し出をいただきます。また有料にしてくださいの方がありがたいのですがというご意見も、たびたび寄せられます。そうした純粋なお気持ちからのご配慮につきましては、心から感謝いたしております。中には、タダほど怖いものはない、何か裏があるのではと思う方もいらっしゃるようですが、その心配は不要です。安心してください。

ニューズレターの発行は、スピリチュアリズム・サークル「心の道場」ができる一つの奉仕として実行しているものです。もちろんこれによって会員を増やし、組織の拡大を図ろうなどという意図は全くありません。当サークルが「霊界の道具」として、可能な範囲内で精いっぱい奉仕をしているに過ぎません。スピリチュアリストとして、霊界から与えられた奉仕のチャンスを最大限に活用したいと願い、実行しているだけのことです。霊界の道具としてスピリチュアリズムの普及に少しでも貢献できれば、それがサークルのメンバーにとって最高の喜びなのです。

このニューズレターが時期のきた方々への良き刺激となり、スピリチュアリズム人生を歩み出すきっかけとなるならば、本当に嬉しいことです。そして新たな奉仕の道へと歩を進めてくださるなら、これに優る喜びはありません。ニューズレターを発刊して早3年になりますが、その間、全国各地の多くの方々から、誠意あふれるお便りをいただきました。

「真の同志・真の仲間」というべき方々との出会いを得て、大きな喜びを味わわせていただきました。私達こそ感謝すべきであると思っています。

ニューズレターを発行するのは、何も私達に限ってのみ与えられた特権ではありません。たまたま霊界の準備・導きがあったがゆえに、当サークルで出すことが可能になったということです。もし今後、何らかの事情でニューズレターの発行ができなくなるとしたなら、その時は、他の人々が私達に替わってそれをすることになるでしょう。それまで私達は、自分達に与えられた奉仕のチャンスとして続けていけばよいのだと考えています。

ニューズレターの対象者について

ニューズレターの内容について述べる前に、まずこのニューズレターの対象者（読者）について触れておきたいと思います。それは一言で言えば、「時期のきた人」を対象としているということです。時期のきた人とは、シルバーバーチやその他の霊訓、さらにスピリチュアリズム関連の書物を読んで、そこに最高のものがあるという直感的な判断ができる方のことです。つまりシルバーバーチが言う「大人の霊」のレベルにまで達した人のことです。このニューズレターは、そうした一定の霊性を持った方々に読んでいただくことを念頭においています。

従ってスピリチュアリズムを他の思想や宗教と同列にしか考えられない人、スピリチュアリズムを単なる神秘主義や心霊的好奇心の対象の一つと考えたりするような人は、読者としてふさわしくありません。また現在、他の宗教やニューエイジに夢中になっていたり、人道主義や道徳レベルの教えに満足し宗教は必要ないと考えている人も対象としてはいません。ましてスピリチュアリズムに反対する人や、スピリチュアリズムの価値を認めない人に読んでい

ただこうとは考えておりません。そうした人達を説得したり議論するために、発行しているわけではありません。

ニューズレターは、これまでのものでは満たされないという人々に向けてのものです。そのような方々に、スピリチュアリズムの素晴らしさを知っていただくことが目的なのです。さらには、すでにスピリチュアリズムを手にしておられる方々に、その真価をより深く理解していただくためのものなのです。つまりこのニューズレターは、外部に向けてスピリチュアリズムをPRしているのではなく、内部向けにスピリチュアリズムをPRをしているということです。

もしスピリチュアリズムの価値を理解できない人がニューズレターを読めば、その内容は、一方的にスピリチュアリズムのドグマを宣伝しているとしか映らないはずです。鼻持ちならないほどの強引さや独断性を感じるはずです。スピリチュアリズムだけを最高のものと決めつける教条主義と思われるかも知れません。おそらくスピリチュアリズムに反対する既成キリスト教会が、シルバーバーチをはじめとする高級霊達をサタン呼ばわりしてきたのと同じ反発が生じることでしょう。

そうした人々からニューズレターの内容について、「ニューエイジや他の宗教に対して必要以上に厳しすぎるのではないか」「マザーテレサのような立派な人々の価値を正しく評価していないのではないか」と指摘されても、私達としては聞き流すしかないのです。その人達が何と言おうと、スピリチュアリズムを絶対的と考える私達は、「ああそうですか」としか言えません。そうした方達と私達の間には接点はないのです。スピリチュアリズムの価値が分からない人達が、スピリチュアリズムを最高だと考える私達の意見に同意するはずがありません。スピリチュアリズム教条主義だと非難されても仕方がないことです。すべてが霊性の問題である以上、それを取り上げるつもりはありません。何事も受け流し、シルバーバーチ流に、「それは残念ですね」と

しか言いようがないのです。

自分流のスピリチュアリズム観に固執する人々に対して

ニューズレターは、スピリチュアリズムを受け入れることのできる時期のきた人々にとって、さらなる霊的進歩と霊的真理の理解の手助けとなることを目的としています。その一方で、スピリチュアリズム内部の人々に対しては、一石を投じるといふ意味があります。問題を投げかける以上、波紋が生じるのは当然であり、反発を持たれる方がいらっしゃることも承知しています。「自分のスピリチュアリズム観は正しい、自分流でやっていくからよい」と思われる方は、ニューズレターの内容に反発心を感じられることでしょう。「その主張は自分の考えとは違う、自分の考えこそ正しい」と固執される方にとっては、ニューズレターは何の意味もありません。人それぞれに考えがあるのは当然であり、ニューズレターに対して賛成・反対の意見があっても構いません。しかし私達としては、そのような方々に対しては、「そうですか。ご縁がないんですね」という姿勢を取ることはできません。

このように述べたからといって、私達は間違いをしでかすことはないなどと思いがっているわけではありません。それどころか、常に誤りを犯さないようにと自分達を戒めています。そのため徹底して「シルバーバーチ」の引用によって話を進めるようにしています。十二分に吟味した上で、間違いないと確信したものを述べるようにしています。(とは言え、そのことで私達が決して間違いをしないということにはなりません……)

ニューズレターでは、私達が正しいと思うことを信念を持って述べています。しかし意見の違う方に対して、議論をしたり説得しようとは考えていません。自分なりの確信を持ち自説を曲げない人に対しては、何も言うつもりはありません。結果的にその方が、地上人生において霊的成長をなし、人類への貢献を果たされるとするならば、それでよいからです。霊界に行ってから後悔することがないようにと、祈る気持ちでいるだけなのです。

スピリチュアリズムの知的レベルのPR

ニューズレターには、スピリチュアリズムが霊的知識と思想内容において、地上世界をリードする立場にあることをはっきりさせるという目的があります。スピリチュアリズムによって示された「霊的真理」が、知識のレベルにおいて最高次元のものであり、さらに思想内容の深さ・広さ・実用性の点でも他に比類なき卓越したものであることを明らかにするという事です。

霊的真理の体系的理解の手助けをする

ニューズレターには、すでにスピリチュアリズムに導かれた方々が、霊的真理を正しく理解するための手助けをするという意味もあります。膨大な霊界通信の中で何が最も信頼できるものかを明らかにし、霊的真理のアウトラインを正確に理解するためのガイドラインを示すということです。これまで日本のスピリチュアリズムにおいては、霊的真理の体系化が十分にこなされてこなかったために、さまざまな問題を生み出してきました。勝手なスピリチュアリズム観や間違ったスピリチュアリズム観が、まかり通ってきました。時にはスピリチュアリズムの衣をかぶって、エゴ剥き出しの心霊治療が行われてきました。あるいは霊的生命とは無縁な書物収集をすることが、スピリチュアリズムであるかのように錯覚されてきました。基本的な霊的知識が正しく認識されていなかったことが、こうした問題を引き起こしてきたのです。

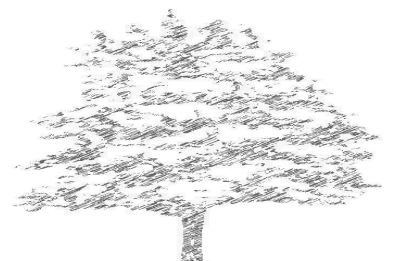
膨大な量の霊的知識を正確に把握するためには、真理の体系的理解がどうしても必要となります。偏りなく真理を知るためには、全体像をしっかりと理解することが要求されます。ニューズレターの目的の一つには、そうした霊的真理の体系的理解の手助けをすることが挙げられます。



霊的真理を地上レベルに還元し、理解の手助けをする

霊界通信は霊界サイドの視点から語られているため、ややもすると地上人の感覚とのギャップから、理解しにくい面が生じます。それを考慮してこのニューズレターは、霊界通信（霊的真理）を、地上人が理解しやすいように地上サイドの観点に立って説明することを一つの目的としています。「心霊治療」においては、霊界の治療エネルギーを地上の患者に注ぎ込むために、スピリチュアル・ヒーラーを媒介とします。霊界のエネルギーレベルを下げることで、患者が受容しやすくなるのです。「霊的真理」もこれと同様で、地上サイド・地上レベルの視点に還元し、地上の諸問題と関係づけることにより、地上人にとって理解しやすくなります。時にはそれが霊界通信の純度を薄めることにもなりますが、逆にその分だけ、理解しやすくなるのも事実です。

また通信を送る霊界サイドには、地上人の「自由意志」の領域に介入してはならない一線が引かれています。そのため私達地上人が、自らの責任として悟っていかねばならない部分が残されています。地上の一つ一つの問題に対して、霊界人はいちいち言及することは許されませんが、地上人同士ならば許されることもあるのです。地上人であればこそ、霊界人には許されないことも可能となるのです。ニューズレターには、霊界人が語ることのできない問題点を地上人の立場から語り、霊的真理をより深く理解する手助けをするという目的もあります。



霊的真理の上限ラインを明確にする

またニューズレターの目的として、霊的真理の厳しき・スピリチュアリズムの厳しきを人々に示すことがあります。スピリチュアリズムが、安易な道徳主義や人道主義（ヒューマニズム）や知的好奇心の対象でないことを、はっきりさせるということです。そのために、「霊的真理が要求する実践の上限ライン」を明確にしています。霊的真理の求める実践ラインを知るということは、即、各自の歩みに反映することです。現実にとどのレベルまで実践に移すのかは一人一人の責任に任せられますが、スピリチュアリズムの要求する理想ラインをしっかりと自覚しておくことは、ぜひとも必要です。

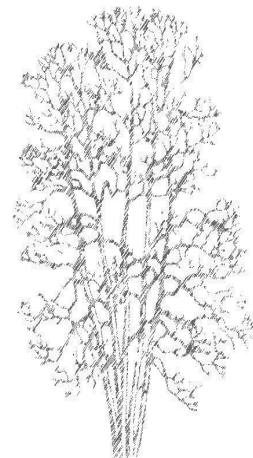
これまでの日本のスピリチュアリズムにおいては、スピリチュアリズムの持つ厳しさがほとんど無視されてきました。地上人にとって心地よい、都合のよい面だけが受け入れられてきました。それが結果的に、正しいスピリチュアリズムの伝統を確立することを妨げてきたのです。日本のスピリチュアリズムの問題点は、「霊的实践に対する甘さ」にあります。霊的真理が要求する厳しさをないがしろにし、中身のない張りぼてのようなスピリチュアリズムになってしまっています。浅野和三郎の時代に作り上げられた初歩的スピリチュアリズムの域を、いつまでも出られずにいます。遺物として存在するだけの初期のスピリチュアリズムのレベルにしがみつき、そこから一向に発展することができずにきたのです。

スピリチュアリズムを信仰レベルにまで引き上げる

またニューズレターの目的として、スピリチュアリズムを「信仰レベル」にまで引き上げる手助けをするということがあります。スピリチュアリズムは霊的真理を中心とした「信仰実践」にまで至らなければならないという基本・原則が、これまでの日本のスピリチュアリズムには根付いていませんでした。スピリチュアリズムについてあれこれ解説したり、その歴史について語る人達はいても、それを本

来の実践レベルにまで引き上げようと努力する人がいなかったのです。霊的真理に触れながらも、いつまでも現象への関心を持ち続けたり、知識のレベルにとどまっている人々が大半だったのです。日本のスピリチュアリズムの指導的立場にある人達自身が、スピリチュアリズムは信仰であるという認識がないのが実情だったのです。

ニューズレターでは、スピリチュアリズムはまさに信仰そのものであり、霊的真理・霊的知識は信仰実践のための道しるべに過ぎないことを示しています。そして、いつまでも知識レベルにとどまっていたはならないことを訴えています。日本のスピリチュアリズムの最大の問題点は、スピリチュアリズムが信仰実践のレベルにまで高められてこなかったということです。このニューズレターには、スピリチュアリズムを信仰レベルにまで高め、真のスピリチュアリズムを日本に定着させる手助けをするという目的があります。



霊界を中心とした、スピリチュアリズムの「霊的ネットワーク」を作る

さらにニューズレターには、霊界の高級霊を中心としたスピリチュアリズムのネットワークを作るという目的があります。過去にシルバーバーチなどの霊訓を読みながらも、その真価を理解できないまま今日に至った人々が多くいます。そうした方々がこのニューズレターに触れ、スピリチュアリズムの価値を再認識し、スピリチュアリズムの教える霊的人生を出発されるならば、霊界の導きが実ったこととなります。そして霊的真理の普及をライフワークにしようと決意されるならば、その決心に応じて、霊界からの全面的な働きかけが始まることとなります。霊界にとっては、信頼できる地上の足場がまた一つ出来上がったことになるのです。そのような方々が増えるに従い、「霊的真理・スピリチュアリズム」という共通の絆による「霊的ネットワーク」が自然と形成されるようになります。今後100年、200年にわたる日本の未来を見据えて、このような無形の霊的ネットワークを作り上げ、高級霊が、よりいっそう地上と日本国内に働きかける条件を築き上げることが、このニューズレターの目的です。

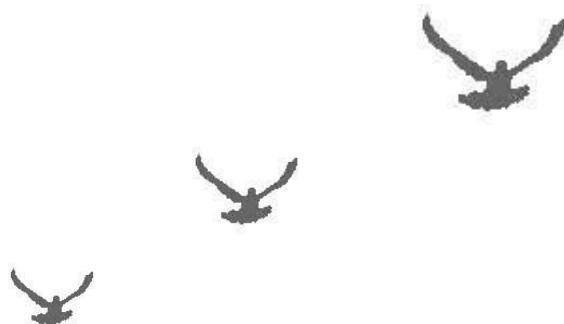
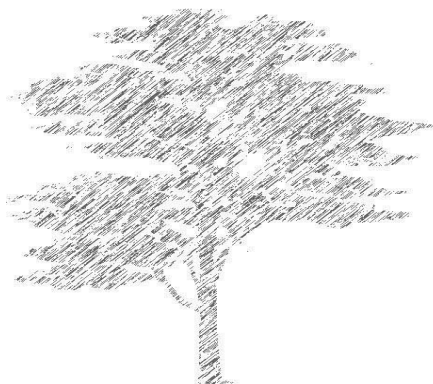
嬉しいことに、すでにそうした方々が全国各地に現れ、霊界の道具として、霊界の足場として大きな働きをするようになってきています。今すさまじい

勢いで「霊的ネットワーク」が日本国内に広がろうとしています。そして5年前とは比較にならないほどの高級霊の霊的エネルギーが、日本全土を覆うようになってきています。組織なき霊的ネットワークが、着実に日本に確立されつつあるのです。

*時折、スピリチュアリズム関連書物の翻訳者として著名な近藤千雄氏と、当サークル「心の道場」やニューズレターとの関係について質問をいただくことがあります。お尋ねに対してはその都度お応えいたしておりますが、この機会に一言ふれておきたいと思えます。

スピリチュアリズム観や目指す方向性において、近藤氏と私達のサークルでは、時に見解が異なることがあります。これまで述べてきましたように、スピリチュアリズムについての理解、そしてそれをどこまで実践に移すかは一人一人に任せられております。当然のことながら、近藤氏には近藤氏なりの考えがあるでしょうし、私達には私達としての考えがあります。当サークルでスピリチュアリズム関連の書籍を自費出版するに際して翻訳を依頼いたしましたが、それ以上の関係はありません。

私達はこれからも、霊的真理をすべての中心に置き、高級霊の意向に忠実であるように務め、可能な限りの貢献をしていきたいと願っています。「霊界の道具」として、今なすべき役割を果たしていこうと考えています。



❖ スピリチュアリズム・ライブラリー ❖

スピリチュアリズム・サークル「心の道場」では、スピリチュアリズム精選シリーズとして、下記の本を自費出版しています。

- ◆スピリチュアリズム入門 (169頁)
ースピリチュアリズムが明かすー「心霊現象のメカニズム&すばらしい死後の世界」
 - ◆続スピリチュアリズム入門 (256頁)
ー高級霊訓が明かすー「霊的真理のエッセンス&霊的成長の道」
 - ◆スピリチュアリズムの真髄「現象編」(297頁)
『The Mediums' Book』 アラン・カルデック編著／近藤千雄 訳
 - ◆スピリチュアリズムの真髄「思想編」(357頁)
『The Spirits' Book』 アラン・カルデック編著／近藤千雄 訳
 - ◆500に及ぶあの世からの現地報告 (437頁)
ーエクトプラズムボックスを通じて明らかにされる死の直後の実生活ー
『Life After Death』 ネヴィレ・ランドル著／小池 英 訳
 - ◆マイヤースの通信ー永遠の大道 (全訳) (271頁)
『The Road to Immortality』 G・カミンズ著／近藤千雄 訳
 - ◆マイヤースの通信ー個人的存在の彼方 (全訳) (304頁)
『Beyond Human Personality』 G・カミンズ著／近藤千雄 訳
 - ◆霊訓 (完訳・上) 『The Spirit Teachings』 (225頁)
ステイントン・モーゼス著／近藤千雄 訳
 - ◆霊訓 (完訳・下) 『The Spirit Teachings』 (260頁)
ステイントン・モーゼス著／近藤千雄 訳
 - ◆シルバーバーチは語る (443頁)
『Teachings of Silver Birch』 A. W. オースティン編／近藤千雄 訳
- 〈現在絶版となっている書籍の復刻予定〉
- ◆シルバーバーチの霊訓 (仮題) 『A Voice in the Wilderness』
トニー・オーツセン編／近藤千雄 訳
 - ◆シルバーバーチの霊訓 (仮題) 『The Seed of Truth』
トニー・オーツセン編／近藤千雄 訳
 - ◆シルバーバーチの霊訓 (仮題) 『The Spirit Speaks』
トニー・オーツセン編／近藤千雄 訳

明けましておめでとうございます。21世紀を迎え、世間は何かと沸き立っています。しかし霊界から見れば、便宜的に地上人が作り上げた時間の区切りには、何の意義もありません。地上世界における大切なこととは、私達地上人類の「霊的成長」以外にはないからです。

スピリチュアリズムに出会うという最高の恩恵に浴していること、また常に私達の背後には導いていてくれる霊達がいることを忘れずに、明るく前向きに歩んでいきたいと思います。

ニューズレターも12号を数え、発刊以来早3年がたとうとしています。その間に全国各地の方々や、海外に在留しておられる邦人の方達から多くのお便りをいただきました。ニューズレターを「霊的实践」のために役立ててくださっていることを知り、心から嬉しく思っています。そうした皆様の声を通じて、ニューズレターがスピリチュアリズム普及に貢献できておりますことを喜び、感謝いたしております。

当サークルでは『シルバーバーチ・愛のシリーズ』3巻の復刻に向けて、準備を進めています。順調にいけば、今年中にはすべて発行にこぎつけられるものと思っています。

新しい年が皆様にとりまして、いっそうの貢献と霊的実りを手にされる年となりますよう、お祈り申し上げます。

